



滝電

2000. 4 No. 21

目 次

会長ご挨拶（藤井克彦）	1	研究室紹介	19
滝電会役員	2	母校のニュース	22
滝電会だより	4	教室情報	26
話題	11	会員の方々のご活躍	28
退官された先生方の近況	13	同窓会だより	31
卒業生の近況	14	卒業者・修了者氏名（就職先）	33
留学生の声	17	分属者・入学者氏名（出身校）	34

平成 12 年 4 月

平成 12 年度 濡電会総会・懇親会ご案内

濡電会会長 藤井 克彦

拝啓 陽春の候、会員の皆様にはご健勝で益々ご活躍の事とお慶び申し上げます。

さて、平成 12 年度 濡電会総会ならびに懇親会を下記のとおり開催致します。昨年は 200 名近くの卒業生や先生方が出席され大盛況でした。母校の先生方を交えて、先輩、後輩、同期生の方々が一堂に会して旧交を温めつつ情報交換を行う絶好の機会でございます。また、総会・懇親会に合わせて日頃ご無沙汰の同期会を企画するのもよろしいかと存じます。現在、各方面でご活躍中の皆様方の原点は母校・阪大電気系であることを思い起こして頂き、お誘い合わせの上、多数ご参加下さいますようご案内申し上げます。

敬 具

記

日 時： 平成 12 年 6 月 2 日（金） 午後 6 時～9 時

場 所： 大阪梅田・新阪急ホテル（大阪市北区芝田 1-1-35 電話 06-6372-5101）

次 第： 1. 総 会 午後 6 時～6 時 30 分 「花の間」

2. スピーチ 午後 6 時 30 分～7 時 「花の間」

「マルチメディア時代の大学図書館」

大阪大学図書館長（工学研究科電子工学専攻教授）西原 浩 先生

3. 懇 親 会 午後 7 時～9 時 「紫の間」

会 費： 学部卒業平成 3 年以降の方 7,000 円

学部卒業平成 2 年以前の方 10,000 円

会費は当日申し受けます。懇親会のみのご参加も歓迎致します。

準備の都合上、出欠のご返事を同封の葉書にて来る 5 月 23 日（火）までにお知らせ下さい。

会長ごあいさつ

—楽しく役にたつ濬電会—



濬電会会长 藤井 克彦
(電気・昭和 28 旧)

濬電会の皆さん、お元気でご活躍のことと拝察申し上げます。

昨年6月、濬電会会長の大役をおおせつかり、会員ならびに役員の皆様のご協力を頂き、会の発展のために微力を尽くして参りました。皆様のご協力に厚くお礼申し上げます。

1年間の経験をとおして感じました事を述べて、今後の指標としたいと思っております。

《楽しい濬電会》

昨年の6月5日の濬電会総会、懇親会には200名余の会員がお集まりになり、普段めったにお目にかかるない同窓の方々と旧歎を暖めることができました。古い卒業生から、卒業したての新入会員まで、広い階層にまたがった共通の話題に花が咲くのは同窓会としての、濬電会ならではと思います。

東海支部、九州支部の集まりにも参加させていただきました。遠方にお住まいになっているため、卒業以来お会いしていない皆様が、お元気で活躍しておられる様子をお伺いし、大変頼もしく、心強く思いました。また、各支部でそれぞれ楽しい催しをご計画いただきました。支部の集まりには、基礎工学部の卒業生も参加しておられることを知り、嬉しく思いました。

昨秋の本部主催見学会では、関西電力のお世話で、四国との直流送電系統の関西側の基地である、紀北変換所を見学させて頂きました。見学内容については後述しますが、途中根来寺にも立ち寄り、ちょっとしたバス旅行でしたが、道中親しくお話しができ、懇親にも大いに役立っていると実感しました。思いつくままに2、3の例をあげましたが、濬電会ではいろいろな企画が実施されています。皆様もそれぞれお忙しいことと思いますが、忙中閑有りで、たまには濬電会の催しに参加されることが、新しい発想につながるチャンスになるのではないでしょうか。

《役にたつ濬電会》

先に述べました関西電力紀北変換所では、最新のサ

イリスター技術の粋を見学しました。見学者全員が電気技術者で、専門的な質疑応答が交わされ、大変興味深いものでした。半導体技術の進歩のお陰で直流送電が実用化したこと、しかし、それでも従来の送電方式との間に厳しいトレードオフが存在することなど、勉強になりました。

11月には母校の研究室を訪れ、大学における最近の研究の一部を拝見しました。企業での研究とは異なり、明日を目指した研究で、明るい将来が予感できる思いました。また、研究に打ち込んでおられる若い研究者の澄んだ瞳を見て、久々ぶりに一服の清涼剤を飲んだような、清々しい気分になりました。

皆様も、時には大学を訪れ、研究の雰囲気に戻ってみられることも、明日への活力剤になることと思います。ぜひ、おすすめします。

《21世紀を目指した濬電会》

現在は『売り手地獄、買い手天国』の時代であると言われています。この時代を切り抜けるためには、斯界のトップ商品を作り続けることが必要です。また、21世紀初頭のキーワードとしてはIT革命、エネルギー問題、環境問題、高齢化社会などが挙げられています。

濬電会は約7000人の研究者、技術者の集団です。本会も同窓会としての活動だけでは、勿体無いと思います。21世紀を目指して濬電会も、新しい動きのお役に立ちたいと思います。

濬電会役員

平成 11 年度濬電会本部および支部役員としてご尽力頂いた方々は下記のとおりです。(○印は本年度新たに就任された役員、敬称略) また、濬電会支部としては、東京、東海、北陸、中国、四国、九州支部が活動を行っています。役員氏名の他に、本部および各支部の連絡先を付記しておりますのでご用の節はお気軽にご連絡下さい。

[本部]

会長

藤井 克彦 (電気・昭 28 旧) 大阪大学名誉教授

副会長

満保 正喜 (通信・昭 25) 金沢工業大学
河村 寿三 (通信・昭 29) 福岡工業大学
山下 一彦 (電気・昭 31) 四国計測工業 (株)
○山本 正隆 (通信・昭 34 修) 沖データ (株)
○池田 博昌 (通信・昭 34) 阪大工通信
○岩川 泰而 (電気・昭 34) 中国情報システム
佐治 學 (電気・昭 35) サービス (株)
名古屋工業大学

幹事

○塩沢 俊之 (通信・昭 39) 阪大工通信
兜 秀昭 (電気・昭 41) 南海電鉄 (株)
○辻 肇一郎 (電気・昭 41) 阪大工電気
東 信一 (電気・昭 45) 三菱電機 (株)
長澤 隆士 (通信・昭 46) 関西電力 (株)
谷口 研二 (電子・昭 46) 阪大工電子情報
村上 孝三 (電子・昭 46) 阪大工情報
近田 彰夫 (電気・昭 47) 住友電工 (株)
辰野 恭市 (電気・昭 47) (株) 東芝
四方洋一郎 (通信・昭 47) 日本電気 (株)
○西澤 貞次 (通信・昭 47) 松下電器産業 (株)
茄子原伸和 (電子・昭 47) オムロン (株)
松平 盛夫 (電気・昭 48) 三洋電機 (株)
栖原 敏明 (電子・昭 48) 阪大工電子
田中 和浩 (電気・昭 49) (株) ダイヘン
○西村 博明 (電気・昭 50) 阪大レーザー
○藤井 治久 (電気・昭 50) 三菱電機 (株)
○北島 圭二 (通信・昭 52) 西日本電信電話 (株)
○疋地 宏 (電気・昭 54 博) 阪大レーザー

○伊瀬 敏史 (電気・昭 55) 阪大工電気
鈴木 俊久 (電気・昭 55) 富士通 (株)
○野田 正信 (電気・昭 56) 関西電力 (株)
○上田 徹 (通信・昭 56) シャープ (株)
○岳村 弘樹 (通信・昭 56) 三洋電機 (株)
○杉本 充生 (通信・昭 56) 住友電気工業 (株)
宮部 義幸 (通信・昭 56) 松下電器産業 (株)
○塚本 勝俊 (通信・昭 57) 阪大工通信
滝 哲也 (通信・昭 57) シャープ (株)
内海 利也 (電気・昭 58) J R 西日本 (株)
加納 隆 (電子・昭 59) 日立西部ソフト
ウエア (株)
大川 剛直 (通信・昭 61) 阪大工情報

連絡先: 〒565-0871

吹田市山田丘 2-1

大阪大学大学院工学研究科電気系内
濬電会事務局 安井晴子
TEL 06-6879-7789 (ダイヤルイン)
FAX 06-6879-7774
E-mail: reiden@pwr.eng.osaka-u.ac.jp

[東京支部]

支部長

○山本 正隆 (通信・昭 34 修) 沖データ (株)

総会幹事団体 KDD (株)、(株) 東芝

幹事団体代表

○若林 博晴 (電子・昭 44) KDD (株)

○辰野 恭市 (電気・昭 47) (株) 東芝

事務局・連絡先

〒183-8511 東京都府中市東芝町 1

(株) 東芝 府中電力システム工場

発電制御システム部

○酒井 敏夫 (電気・昭 54)

TEL 042-333-2610 FAX 042-340-8029

E-mail: toshio1.sakai@toshiba.co.jp

[東海支部]

支部長

佐治 学 (電気・昭 35) 名古屋工業大学
代表幹事・連絡先

〒444-8606 岡崎市戸崎町字大道東 7 番地
中部電力(株) 岡崎電力センター変電技術課
江本 邦夫 (電気・昭 58)
TEL 0564-55-5082 FAX 0564-57-1384
E-mail: Emoto.Kunio@chuden.co.jp

[北陸支部]

支部長

満保 正喜 (通信・昭 25) 金沢工業大学
代表幹事・連絡先
〒910-0944 福井市文京 3-9-1
福井大学工学部電子工学科
松本 忠 (通信・昭 3 8 修)
TEL 0776-27-8569 FAX 0776-27-8749

[九州支部]

支部長

河村 寿三 (電気・昭 29) 福岡工業大学
代表幹事・連絡先
〒820-8502 飯塚市大字川津 680-4
九州工業大学情報工学部電子情報工学科
金藤 敬一 (電気・昭 46)
TEL 0948-29-7664 FAX 0948-29-7651

[四国支部]

支部長

山下 一彦 (電気・昭 31) 四国計測工業(株)
代表幹事・連絡先
〒796-0033 愛媛県西宇和郡伊方町九町コチワキ
四国電力(株) 伊方発電所設備管理課
森田 寛 (電気・昭 48)
TEL 0894-39-0221 内 2240 FAX 0894-39-1325

[中国支部]

支部長

○岩川 泰而 (電気・昭 34) 中国情報システム
サービス(株)
代表幹事・連絡先
〒730-8701 広島市中区小町 4-33
中国電力(株) 系統運用部
○三川 玄洋 (通信・平 3)
TEL 070-5826-7579 FAX 082-523-6323
E-mail: 358870@pnet.energia.co.jp

澪電会だより

追悼文

福西宏有先生のご逝去を悼んで

電子工学専攻教授福西宏有先生は、去る平成11年7月8日呼吸不全のため逝去されました。享年56才。謹んで哀悼の意を表わします。

福西先生は昭和41年3月に大阪大学基礎工学部制御工学科を卒業、同年4月に同大学院基礎工学研究科物理系専攻修士課程に入学し、昭和43年3月に修了、同年4月に同博士課程に入学され、12月に中途退学し、日立製作所に入社されました。同中央研究所、原子力研究所を経て、昭和57年8月に同エネルギー研究所の主任研究員となられました。昭和60年4月に新設された基礎研究所に所属換え、平成4年2月に主管研究員、福西研究グループのグループリーダーとなられました。平成10年9月に大阪大学大学院工学研究科電子工学専攻集積電子システム工学講座教授に就任されました。

先生は、昭和60年までは、原子炉、核融合装置、原子力発電プラントなどの診断、制御などに関する研究に取り組まれ、原子炉の雑音解析では動特性を決定する多変数モデルの必要性を指摘し、多変数自己回帰や偏コヒーレンシイモデルを提案され、世界的に高く評価されました。昭和59年に米国で発生した原子力発電所の炉心溶融事故を機に、原子炉事故時に対応する運転者支援システムの開発が我が国でも国家プロジェクトとして取り上げられました。先生は後にこの研究プロジェクトのリーダーとして、優れた研究業績を挙げられました。

昭和60年4月に新設された日立製作所基礎研究所において、21世紀を展望する新しい研究を開拓することを目標として、先生は人の知覚や認識過程に関する研究を提案されました。脳を動的システムとして捉え、このシステムを同定するため、光計測法を用いて実時間の多点計測の研究を始められ、特に、聴覚皮質の時空間計測・解析の分野でのパイオニアとして世界的に高い評価を受けておられました。

また、学協会関係では先生は数々の委員長等を歴任されるなど精力的に活動されておられ、種々のプロジェクトを展開するなど、今後の発展が大いに期待されておりましたが、その意思を遂げることが出来ずに急逝されました。

葬儀告別式は7月10日吹田市千里会館において、各界の代表・門下生多数列席のもとにしめやかに行われました。

ここに、謹んで、心からご冥福をお祈り申し上げます。

(宋 文杰(電子工学専攻助教授)記)

平成11年度 総会・懇親会

平成11年6月4日(金)午後6時より大阪梅田・新阪急ホテルで190名の参加者を得て行われた。総会は村上孝三幹事(電子・昭46)の進行役のもとで行われた。北田幹夫会長(電気・28新)の挨拶の後、平成10年度事業報告が佐々木孝友総務幹事(電気・昭42)から、また平成10年度決算報告が谷口研二会計幹事(電子・昭46)から行われ、それぞれ承認された。続いて、北田会長より新会長に藤井克彦氏(電気・昭28旧)を推薦する旨の提案があり拍手をもってこれを承認し、藤井新会長の就任の挨拶が行われた。次に藤井新会長から本部席新副会長に池田博昌(通信・昭34)の推薦と新幹事13名の指名が行われ、拍手をもって承認の後、新副会長、新幹事の自己紹介が行われた。引き続き、谷口新総務幹事から平成11年度事業計画が、また辻毅一郎新会計幹事(電気・昭41)から平成11年度予算の説明が行われ、いづれも承認された。

総会に引き続き、恒例のスピーチが行われた。本年は、電子工学専攻の濱口智尋教授(電気・昭63)から「カエルの脚から集積回路・電気の歴史」と題してお話をいただいた。電気工学の基礎を築いた人々の紹介から、半導体の開発の過程、さらには現在の集積回路に至るまでの開発の歴史をユーモアを交えて紹介され、大変興味深いお話をあった。

平成11年度 大阪大学 濡電会 懇親会



懇親会は佐々木前総務幹事の司会進行のもとで行われた。藤井会長のご挨拶の後、熊谷信昭元総長（通信・昭28旧）、続いて沖電線㈱社長の西澤定律氏（通信・昭33）からご祝辞を頂戴した。各支部から頂戴した祝電の披露の後、元会長の桜井良文教授（電気・昭18）の音頭で乾杯し、賑やかな歓談のひとときを持った。最後に新東京支部長である㈱沖データー社長の山本正隆氏（通信・修昭34）のご発声のもと万歳三唱を行い、盛会のうちに散会となった。

（佐々木孝友（電気・昭42）記）

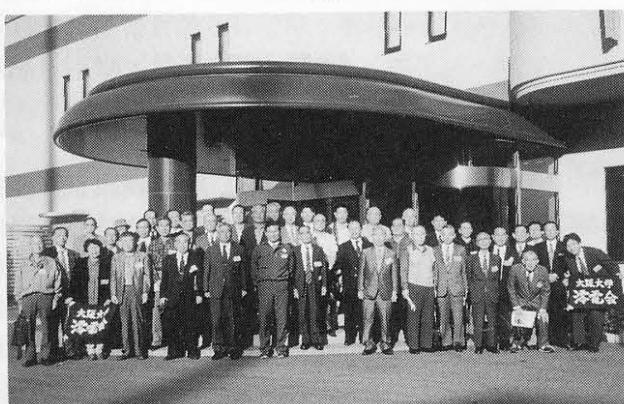
平成11年度 学外見学会

恒例の学外見学会が平成11年10月29日（金）に行われた。本年度の見学先は関西電力（株）紀北変換所である。会長の藤井先生、副会長の池田先生をはじめとする総勢39名の参加を得て、盛況に開催された。変換所訪問に先立ち、新義真言宗の総本山として名高い根来寺に立ち寄り、参拝するとともに、同窓生親睦のための昼食をとった。国宝の大塔や国指定名勝の庭園など、非常に見所が多く、1時間ばかりの見学時間があっという間に過ぎていった。

昼食後、再びバスに乗車し、一路、紀北変換所に向けて出発した。車中では、急遽参加できなくなった関西電力（株）野田正信幹事（電気・昭56）に代わって同行頂いた山元康裕氏（電気・修昭55）から、紀北変換所の概要について、パンフレットに基づいて説明頂いた。1時間足らずのドライブを楽しむうちに、紀北変換所に到着した。

紀北変換所は、平成12年夏に営業運転を控えている関西四国直流連系設備のうち、関西側の変換所となるもので、工事をほぼ終了し、試験を行っている。紀伊水道に敷設された海底ケーブルを経て直流送電された橋湾火力発電所（徳島県阿南市）からの電力を交流に変換する役割を果たす。

見学会は、ビデオによる阿南紀北直流幹線新設工事



作業などの紹介からスタートした。まもなく営業運転を迎えるということで、所内は活気に満ちており、色々と聞かせて頂いたお話の中からも、この大規模プロジェクトに対する熱い思いがひしひしと伝わってきた。

その後、4つの班に分かれて所内の見学を行った。巨大なバルブホールに収められた50万ボルト大容量サイリスタバルブをはじめ、世界最大級、かつ最先端技術の設備を目の当たりにして、参加者一同、大いに興奮しながら見学させて頂いた。積極的な質問が数多く見られ、それに対して丁寧にご説明頂いたこともあり、予定していた時刻を若干超過し、後ろ髪を引かれながら帰路につくことになった。

現地の出発が遅れたことと阪神高速の渋滞のため、予定の時刻より大幅に遅れての解散となつたが、それ以外は特に大きな問題もなく無事見学会を終了できた。見学会の実施に際して、（株）関西電力の関係各位には多大なるご尽力とご配慮を頂いたこと、ここに厚く御礼申し上げます。

（大川剛直（通信・昭61）記）

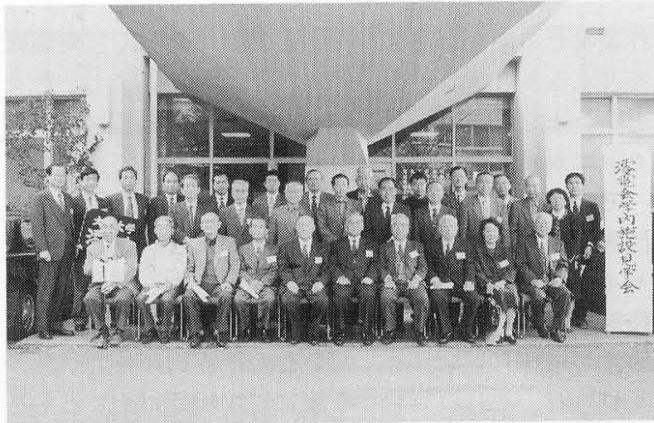
平成11年度学内施設見学会

平成11年11月22日（月）、鴻電会主催の学内施設見学会が実施された。見学会には幹事4名を含めて32名が参加し、超伝導エレクトロニクス研究センター、電子情報エネルギー工学専攻・ヒューマンインタフェース工学講座、通信工学専攻・通信工学基礎論領域および電子工学専攻・量子ミクロ工学領域の見学を行った。午後1時電気系会議室に集合し、藤井克彦会長の挨拶に引き続いで、疋地 宏幹事から見学会のスケジュールが説明された。その後、見学者は3班に分かれ、それぞれ塩澤俊之幹事、疋地 宏幹事、西村博明幹事が引率し、コーヒーブレイクを挟んで2箇所ずつ見学した。また塚本勝俊幹事が写真撮影を担当した。

超伝導エレクトロニクス研究センターでは、超伝導によるエネルギー貯蔵とテラヘルツ電磁波の発生の実験装置を見学し、それぞれ電気工学専攻の伊瀬敏史助教授ならびに同研究センターの萩行正憲教授から説明を伺った。

電子情報エネルギー工学専攻・ヒューマンインタフェース工学講座の見学は先導的研究オープンセンターにおいて行われ、同講座の岸野文郎教授、北村喜文助教授、正城敏博助手の説明を受けた後、実環境と仮想環境を融合したバーチュアル・リアリティのデモンストレーションを見せて頂いた。

通信工学専攻・通信工学基礎論領域では、光ソリトン伝送実験装置の見学を行った。通信工学専攻の戸田



裕之講師ならびに電子情報エネルギー工学専攻・先端通信工学講座の丸田章博助手から説明を受けた後、ファイバに入力する光強度を変化させることにより、光パルスがソリトンになる様子が実演された。

電子工学専攻・量子ミクロ工学領域では、森田清三教授から、原子を自由に操作することにより原子レベルから新しいデバイスを構築する先端的な研究について大変印象的な説明を受けた後、原子間力顕微鏡の見学を行った。

以上、大阪大学が担う先端的な研究の一端に触れ、見学者一同は深い感銘を受けたようである。当日は天候にも恵まれ、大変有意義な見学会となった。

(塩澤俊之 (通信・昭 39) 記)

電気系卒業祝賀・謝恩会

平成 12 年 3 月 24 日千里阪急ホテル千寿の間にて新卒業生 349 名を含む 427 名が参加して盛大に行われた。式典の部は辻毅一郎会計幹事の司会で進められ、藤井克彦会長、櫻井良文氏（大阪大学名誉教授、大阪工業大学前学長）、吉田健一氏（住友電気工業（株）常務取締役、（株）シンセシス代表取締役社長）、松浦虔士教授（電気工学専攻長）からご祝辞をいただいた。

藤井会長からは、「ひまがあったら本屋へ行って財布をはたけ」と、技術情報の収集源としての本の重要性を述べられた。櫻井先生は「水」のように、自ら活動すること、自ら道を創ること、自ら障害を乗り越えること、自ら清くすること、自ら変化を厭わぬことが重要であると説かれた。吉田氏は、企業トップから見た実社会の厳しさに言及され、卒業生に望むこととして、意見を率直に述べること、自らの実績を蓄える（一芸に秀でる）ことの 2 点を挙げられた。松浦教授からは、数字に強い分析力をつける、「地球に生き宇宙を拓く」というようなスケールの大きさを追求すべしとの激励の言葉をいただいた。

各支部からの祝電披露のち、塚本勝俊会計幹事の司会でパーティーに移り、北田幹夫前会長のご発声で



乾杯、なごやかに歓談の時を持った。今年から楠本賞の他に新たに設けられた工学賞の受賞者小林祐貴君、武次潤平君、安藤一道君および高木龍君の 4 名に、藤井会長から記念品（今年は世界大百科辞典と置時計の 2 点）が授与された。恒例となった餅つき、福引きが賑やかに行われた。

卒業者の代表として電気工学専攻の堤田恵介君から教官および瀧電会諸先輩への感謝と将来への決意が述べられた。池田博昌副会長の「瀧電会の諸先輩に十分面倒を見てもらひなさい」という力強い激励の言葉と万歳三唱をもってめでたく祝賀・謝恩会はお開きとなつた。

ご多用中にもかかわらずご臨席賜りましたご来賓の方々、電気系職員の方々に厚く御礼申し上げます。瀧電会の安井晴子様には献身的にこの会の準備に当たつていただき、また一部の学生諸君・電気系秘書の方々には準備・受付業務などお手伝いいただきました。これらの方々に心より御礼申し上げます。今年も快く記念品、福引きの景品をご提供いただきました（株）日立製作所、三菱電機（株）、オムロン（株）、関西電力（株）、三洋電機（株）、シャープ（株）、住友電気工業（株）、（株）ダイヘン、（株）東芝、南海電鉄（株）に厚く御礼申し上げます。なお昨年度から楠本賞は電子情報エネルギー工学科で一名が受賞し、旧学科に対しては工学賞が授与されることになりました。残念ながら電気系 4 学科には楠本賞の受賞者がありませんでした。

(辻毅一郎 (電気・昭 41) 記)

平成 11 年度東京支部総会報告

平成 11 年 4 月 23 日(金)、平成 11 年度東京支部総会が学士会館にて開催されました。本部からは池田博昌教授にご列席いただくとともに、工学部電気系・基礎工学部（電気、制御、情報）の卒業生を含む支部会員の多数の参加が有り、全参加者は当日の雨模様の天候にもかかわらず 100 名を超す盛会となりました。



本年度は、総会、懇親会に先立って、通信工学科の池田博昌教授から「大阪大学電気系教室の現状について」と題してスピーチをいただくことから始まりました。池田教授は、大学教育体制の変革や、最近マスクミを賑わした阪大電気系の先生方のご活躍ぶりをお話いただきました。参加者からは、大学の最近の変わりようが良くわかったという感想が多く聞かれました。

引き続く総会は、竹本猛夫支部長のご挨拶で始まりました。竹本支部長からは昨年度から先生にスピーチをお願いし、また幹事会社を2社とし支部活動を活発にする企画をおこなっていることなど説明されました。また、本総会にて支部長を山本正隆新支部長に引き継ぐ旨のご紹介がありました。次いで池田博昌教授に濁電会本部を代表してご挨拶いただきました。引き続き、濁電会元会長の尾崎弘名誉教授のご発声による乾杯と、幹事会社を代表してKDD(株)の若林博晴氏のご挨拶により懇親会に移りました。

1時間余りのにぎやかな歓談後、次回幹事会社（日本電気（株）、日本電信電話（株））を代表して日本電気（株）西谷隆生氏より決意表明があり、山本新支部長からご挨拶をしていただきました。最後に幹事会社を代表して（株）東芝の辰野恭市氏のご発声で万歳三唱を行い、盛況のうちに解散となりました。

今回の総会運営に当たり、いろいろとご助言、ご支援いただいた前任の（株）日立製作所、松下通信工業（株）の関係者の皆様と、濁電会本部事務局の安井晴子様に紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

（酒井 敏夫（電気M・昭56）記）

平成11年度北陸支部総会報告

平成11年度濁電会北陸支部総会は、6月12日（土）の午後3時から、富山県宇奈月温泉の北陸電力（株）宇奈月保健館で開催された。参加者は総勢26名であった。ご来賓として、濁電会元会長の櫻井良文大阪工業大学学長、本部より副会長池田博昌先生、総務幹事谷口研二先生、事務局安井晴子様、また講演会講師とし

て宮崎慶次先生のご出席を頂いた。総会では、恒例のように平成10年度の行事・会計報告、11年度の行事・予算の承認に引き続いて池田先生からご挨拶、谷口先生から本部の近況について報告をいただいた。その後、宮崎先生から「21世紀のエネルギー問題」と題して、記念講演をしていただいた。世界のエネルギー事情など多くのデータを紹介されながら、地球環境を保全し経済の持続的発展を維持するためには、原子力発電が必要であることを強調された。記念講演の後、全員で記念写真を撮影した。温泉で一風呂浴びた後、6時から懇親会に移った。満保支部長、櫻井先生のご挨拶、関西電力山崎吉秀常務取締役による乾杯、さらに来賓の方々に一言ずつ挨拶していただいた後、支部会員相互で、また会員と来賓の間で話が弾み、懇親会は盛会であった。

今回は、北陸支部第10回総会を記念して、翌日関西電力（株）黒部川第4発電所見学を計画した。定員は20名であり、当初定員オーバーも懸念されたが、当日の参加者は19名であった。黒部川電気記念館で概要説明を受けた後、黒部峡谷鉄道の宇奈月駅を8時30分にトロッコ電車で出発し、櫻平で豊平エレベーターに乗り換えて垂直に200メートル上に登り、さらに小さなトロッコで黒四発電所に向かった。発電所は地下にあって、外部からは全く見えない。最大発電出力は335,000kWである。発電所内を見学し、発電機をバックに記念写真を撮った後、インクライン（ケーブルカー）とバスを乗り継いで黒部トンネルを抜けて黒部ダムに到着した。このような渓谷に壮大なダムと広大な地下発電所を建設した先人の努力に大きな感銘を受けた。一見に値するコースである。しばらく黒部ダムを散策した後、来年の再会を期して散会した。黒部ダムからは、トロリーバスで関電トンネルを通って信濃大町駅から帰るグループと、ケーブルで大観峰、立山トンネル、室堂を経由して帰るグループに分かれた。

今回の支部総会開催にあたって、総会会場と宿泊で





は北陸電力(株)に、また、黒四発電所見学に際しては関西電力(株)に多大のご厚意をいただいた。改めて厚く御礼申し上げます。

(龍山智栄 (電子・D昭47) 記)

平成11年度東海支部総会報告

平成11年7月3日、名古屋東桜のメルパルクに於いて、濁電会東海支部の総会を開催しました。当日は、佐治支部長(電気・昭35)始め昭和13年卒から平成2年卒まで20名の出席に加え、ご来賓として藤井会長、池田本部副会長、谷口総務幹事、安井氏にお越しいただき、総勢24名の盛会となりました。

総会では、まずご来賓の皆様よりお言葉を頂戴しました。藤井会長からは、濁電会員が6千数百名にも上るようになったが、さらなる会の隆盛のために新企画を考えたいとのお話がありました。また、事務局の安井氏のご尽力に対する感謝の言葉が述べられました。池田本部副会長ならびに谷口総務幹事からは、会員名簿の作成に関する協力の依頼と会員相互の縦横の結び付きの教化についてお話がありました。

続いて議題に移り、予算案の承認、運営規約の承認がなされました。前年まで支部長を務められた倉岡氏(電気・昭22)が顧問に就任され、引き続きご指導いただきました。本部からは学外見学会を始めとする事業計画について説明がなされました。東海支部からも積極的に参加させていただきたいと思います。

総会に統いて懇親会に入りました。懇親会では、先輩の皆様から夫婦円満の秘訣やスキー・オーディオ・山歩き・テニスなど多岐にわたる趣味の話をご披露いただきました。大学の先生方から最近の技術研究の動向や学生気質をご教示いただきました。和やかな雰囲気のなかで、久しぶりに顔を合わせた会員相互が近況報告や昔の思い出話に花を咲かせました。最後に全員で記念撮影をし、またの再会を約束して散会しました。



東北支部では、会を益々発展させ、会員相互の親睦をさらに深めていきたいと考えております。つきましては、今回の総会に散会されなかった会員の皆様、特に近年卒業された皆様も、次回総会には是非ご出席いただきますようお願いいたします。なお、総会の開催案内および出欠確認には電子メールも活用させていただくこととなりましたので、併せてよろしくお願ひいたします。

(今川 浩 (電気・昭63) 記)

平成11年度九州支部総会・見学会報告

濁電会九州支部は1992年の発足以来、福岡、大分、沖縄、熊本、福岡、福岡、長崎と場所を移して会を持ち、その第8回目の支部総会・見学会を99年10月23日(土)に北九州で開催しました。

今回は、本部より藤井克彦先生、桜井良文先生、谷口研二先生、池田博昌先生、白川 功先生、安井晴子様、また支部会員(敬称略)の河村寿三(気S29)、生地文也(元教官)、上原勝徳(子S45)、坂口真一(子S38)、金篠敬一(気S46)、武石泰亮(信S54ハ)、森田泰次(気S39)、山元 茂(子S60)、内藤正路(子H1)、西垣 敏(子S45)、服部励治(気S61)、笹尾 勤(子S47)、河合 壮(元教官)、小森望充(基礎工、制S57)の各氏にご参加頂きました。

会はまず、関門海峡の歴史と明治・大正のロマンの香りを門司に訪ねる見学会でスタートしました。遊覧



船にて午後1時半門司港出発、関門橋下、めかり神社を通って満珠・千珠島をのぞみ、壇ノ浦からは早鞆瀬戸の急流を巖流島、引島へと逆らって、歴史を800年も遡る旅を楽しみました。門司港は明治から大正にかけて大陸への玄関でした。AINシュタインもここから日本に入りここで日本を離れたのです。会参加者はそれらの跡を旧三井俱楽部館などに訪ねました。午後4時半、国の重要文化財である旧松本邸（現西日本工業俱楽部館、戸畠）で総会が行われました。河村支部長挨拶、藤井会長のご挨拶と濬電会に関するお訴えの後、九州支部の事業と会計報告を承認し、写真撮影で総会を閉じました。引き続く講演会では西垣が、「表面」が普遍的意味を持つとしたら」と題して、大きな集団とその「表面」の間の葛藤、「表面」と人間生活、「表面」についての新しい見方、および自身の専門も絡めた「表面の復権」の話題を並べました。なお「1185年5月2日早鞆の瀬戸で何が起きたか」という番外お喋りも出ました。フランス料理の懇親会では、本部からお越しの先生方から阪大の現状や先生方のご活躍のお話、各支部会員からは現況、活躍や苦労話がワインに載せて語られました。重要文化財旧松本邸の内部と庭園の見学をもって、午後8時半、総会・見学会を閉会しました。

なお翌24日（日）、6名がゴルフに興じ、他に小倉歴史散歩を楽しんで、北九州での濬電会を締めくくりました。

（西垣 敏（電子・昭45）記）

平成11年度中国支部総会報告

濬電会中国支部は、11月27日（土）、本部より副会長池田博昌先生、総務幹事谷口研二先生ならびに事務局安井晴子様をご来賓としてお迎えし、さらに基礎工電気の卒業生3名にもご参加いただき、総勢25名の参加者を得て、広島市の小町クラブで支部総会を、同じく広島市のマツダミュージアムにおいて見学会を実施しました。

当時はまず、広島駅に集合後、バスにてマツダ株式会社宇品工場内にあるマツダミュージアムに移動し、総務部の方のご案内により当施設の見学をしました。技術展示室では、剥き出しのシャシー、ボディーをはじめ、普段見ることが出来ないものを見る事ができ、また当日は土曜日で生憎と組み立てラインは止まっていましたが、1つのラインで種類の異なるクルマを組み立てる生産技術の片鱗を見せて頂きました。歴史・未来展示室では、3輪自動車をはじめ懐かしいクルマから、新技術を搭載したコンセプトカーまで展示して



あり、皆さん興味深く覗き込んでおられました。

見学会終了後、バスにて中国電力関連施設の小町クラブに移動し、支部総会を開催しました。まず、三上支部長から開会の挨拶があり、続いて池田副会長からご挨拶を、谷口総務幹事から母校の近況についてご紹介を頂きました。その中で大学院重点化改革の一環としての総合的再編、国立大学の独立行政法人化の動きについてお話をあり、母校における大きな動きを感じました。引き続き議事に入り、支部事務局から事業報告案、会計報告案の説明があり、そして平成5年の中中国支部設立時より支部長をして頂きました三上様から岩川様への支部長交代について全会一致で承認されました。

その後、懇親会に移り、池田副会長の乾杯の音頭により懇談に入りました。参加者全員の自己紹介・近況報告を含め瞬く間に時間が過ぎ、最後に岩川新支部長の乾杯の音頭で来年度の再会を期しての散会となりました。

最後に、土曜日にもかかわらず見学会での案内を頂いたマツダ株式会社総務部総務グループの方に紙面を借りてお礼申し上げます。また、中国支部の会員の皆さんに、ご都合が合いましたら来年度の支部総会には是非ともご参加下さいよう、お願い申し上げます。

（三川 玄洋（通信・平3）記）

平成11年度濬電会ゴルフ例会報告

濬電会ゴルフ例会は、平成11年度で89回の開催を誇る、濬電会内の親睦を図る伝統的なゴルフコンペで、昨年度も春秋の二回、三田市郊外の武庫ノ台ゴルフコースで開催されました。

コンペは、一般の部とシニアの部（満年齢65才以上）の部に分けて優勝を競われています。今年度の結果は以下の通りとなりました。

第88回は、生憎の天候でしたが、多数の方に出席していただき、一般の部では柴田さんが、シニアの部で毛利さんがそれぞれ優勝されました。第89回は、

藤井会長、池田副会長にもご出席いただき、好天のもと、開催されました。一般の部はベスグロも獲得された西馬さん、シニアの部では最高齢の池田さんが優勝されました。楽しくゴルフを終えた会食の場で、会長からは、伝統もあり、濁電会で唯一のスポーツの親睦の場、メンバーの親睦の場として積極的に友人とともに参加し活用を、とのお言葉をいただきました。表彰式の後、両優勝者のお話を始め、ゴルフの話で盛り上がる中、次回は同期の友人を誘い合わせのうえ、出席を誓い合い、三々五々帰途につきました。

	第88回	第89回
開催日	H11.6.19(土)	H11.11.20(土)
参加者数	6組22名	4組15名
一般の部 優勝	柴田 浩(通36) gross 102 H.C. 25 net 77	西馬 重幸(電28) gross 83(ペナリティ) H.C. 9 net 74
シニアの部 優勝	毛利 悅造(通27) gross 89 H.C. 14 net 75	池田 盈造(電16) gross 99 H.C. 18 net 81

今年度につきましても昨年同様、6月17日(土)、11月25日(土)の2回開催を予定しております。場



所は、武庫の台ゴルフコースで、それぞれ7組(28名)ご用意しております。昨年度は残念ながら、予約人数に余裕がございました。お申し込みは、はがきにお名前、卒業学科、卒業年次、連絡先(住所、郵便番号、電話番号)をご記入の上、濁電会事務局にご連絡下さい。同期の方などとご一緒に回るなど、ご希望がございましたら、はがきにその旨、追記していただければ極力配慮させていただきますので、お誘い合わせの上、ふるってご参加頂きますようご案内いたします。ご参考までに、参加費は¥27,000円、先着28名様までお受けさせていただきます。

(野田正信(電気・昭56)記)

総会・懇親会のひとこま



話題

鉄鋼圧延工学 35 年

(株) 東芝
電力・産業システム
技術開発センター
安部 可治
(電気・昭 37、M39)

e-mail: anbe@seken.fuchu.toshiba.co.jp



卒業以来 35 年間鉄やアルミの圧延の研究開発をやっております。鉄は製錬、製鋼、圧延の順に作りますが、板材の圧延についていいますと、250mm 厚のスラブを 1250°C 位に加熱して 1.0mm、0.7mm 厚位まで熱間圧延し、さらにこれを 0.15mm、0.05mm 厚などに冷間圧延するのが主流です。

圧延設備は機械メーカーが圧延機械を、著者のような電気メーカーが圧延機駆動、設定制御装置、センサーなどを製作しています。

圧延機駆動は入社当時は M-G でしたが、2 ~ 3 年してから直流電動機のサイリスタレオナードが開発され現在でも大部分は稼動しております。しかし 1980 年頃から交流電動機（誘導電動機、同期電動機）の可変速技術を開発してきました。これは交流電動機の数式モデルが開発されたことが原動力になっています。現在では新設のものは 10000kW の主機から 2.2kW クラスの補機迄、全て交流電動機を製作しています。これらの交流電動機とその可変速制御技術は、新幹線に代表される電気鉄道、揚水発電電動機なども同じような技術となっています。

入社当時にコンピュータが応用され始めて、鉄鋼業界もいち早くこれを応用するという気運にありました。圧延では設定計算（圧延機のロール間隙やロール速度の設定値を数式モデルを用いて計算する）や各種の自動制御に応用することが考えられました。著者等も設定計算の研究開発にとり組み始めましたが、電気屋にとっては難問でして、圧延理論、塑性加工理論など当時は教えてくれる人もいない状況で独学でやるしかありませんでした。しかし始めの 10 年間位は失敗（数式モデルの精度が悪くて使いものにならない）ばかりでした。やはり金属屋さんとの協力が必要だと痛感し

て、金属のいろんな圧延条件下における変形抵抗などを協同でやって、やっと実用に耐える数式モデルが出来ました。この間、日本鉄鋼協会の圧延理論部会の皆様方と議論させていただきましたが、日本は米国の経験的な数式モデルではなく、あくまで理論的にやろうということが共通認識です。

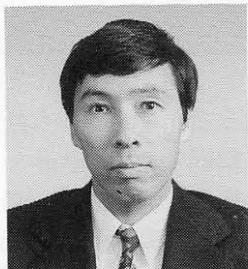
また、これらの研究開発と並行して、板厚、板幅、材料温度、板形状などの制御開発を行ってきました。初期の PID 制御は今でも大部分で使っておりますが、非干渉制御、H 無限大制御、大阪大学の藤井教授の提案された ILQ 理論などいわゆる多変数制御なども一部では実用化できています。多変数制御は圧延の数式モデルが基礎となっていて、この研究開発には随分苦労しています。また、マイコンを用いた PLC や LAN (100MBPS など) の開発が実用化のために不可欠です。今後は材質の作りこみなどが有望になってくるでしょう。

日本の鉄鋼業はまだまだ世界的に競争力を有していますが、以上のように国の方針、鉄鋼メーカー間、設備メーカーとの協力など国としての層の厚い技術とモノ作りが基本になっていると思います。

したがって、今後はどのような分野で国際競争力のあるものを研究開発していくかについて、徹底した議論（若い人を中心に経験者の意見を参考にする）が必要でしょう。1970 年に始めて米国の国際会議に出席しましたが、帰りのオミヤゲはロケットを含む航空機、コンピュータ、原子炉といわれました。今でもあまり変わっていないと思います（一部の方々から日本の方が上だと叱られるかもしれません）。上記の機器、システムを研究開発する上で米国ではいろんな方々が長年努力してきた結果で今の状態があるのだと思います。要は国としての全体の競争力が必要だといいたいだけです。

マルチメディアの風景

NECヒューマン
メディア研究所
研究部長
笠原 裕
(電子・昭48、M50)



1960年代のはじめに、コンピュータで絵が描けるようになって40年、最近では、マルチメディアという言葉が一般にも認知されるようになってきました。ドキュメントに画像や図を貼り付けたり、音や動画まで含んだWebページをインターネット上で閲覧することが日常的に行われています。生活空間も、ゲーム、カラオケ、BS/CS放送と、新しい映像メディアの存在があたりまえの風景となっていました。

私は、入社以来、地図システム、プレゼングラフィックス、電子ブック、画像検索などの技術開発や、マルチメディアコンテンツ制作の仕事に携わってきました。1970年代後半、画像を1枚ディスプレイに表示するのに何十秒もかかった時代には、絵が出るだけでも大騒ぎでした。また、1980年代後半からはマルチメディアの時代と言われ、ハイパームディア、マルチメディアDBなどの研究開発を推進していました。この頃に試作したハイパームディアで美術作品を辿るシステムは目新しさ故に多くの人の興味を引き、新聞や雑誌で話題にのぼることもありましたが、広く普及するには、プラットフォームのコストの問題、データ制作の問題などを抱えていました。

装置・デバイス技術の進展で、フルカラー表現のイメージや3Dグラフィックスがリアルタイムに生成可能になると、CG・映像を多用した活動が多く見られるようになりました。性能の良くなった機器を使って、今度は単なる表示から、より高度な表現を求める方向や、マルチメディアならではの検索手がかりを用いた、マルチメディアデータの蓄積・検索や編集など、新しい技術の方向性がでてきました。文字情報が論理的な情報を伝達するのに適しており説明的であるのに対して、マルチメディア情報は、印象や感覚を伝えるのに適しており直感的でもあります。この特徴を活かして、感性キーワードによるイメージ検索、スケッチ画での検索、動画の中のオブジェクトのインデクシング、マルチメディアのオーサリングツールなどなど、マルチメディア特有の技術開発を推進してきました。

マルチメディアの技術は、このように次々と対象領

域を広げ、新しい世界を我々に見せてきました。最近では、CGを用いていないアドベンチャー映画は無いといって過言ではありませんし、CD-ROMやDVDで各種のエンタテインメントコンテンツが流通し、インターネット上でも画像・映像が楽しめます。携帯電話上でさえ画像データが見れるようになってきました。今後、益々発展するインターネットや、これから始まるW-CDMA、デジタルデータ放送と高度化していくインフラ上でマルチメディア情報が飛び交う世界になっていくことは間違ひがありません。

このような時期には技術は、また新たな様相を見せててくれます。マルチメディア分野の場合も、技術を中心から人間側、あるいは応用側からの視点や発想が重要になってくる転機もあります。マルチメディアをどう使い、何を伝えるか、言い換えれば、どう表現すれば、意味・意図や印象が的確に相手に伝わるかという高次リテラシーの問題です。

折しも2000年であり、10年後の社会や10年前に行われた現代の姿の予測の検証、20世紀の主要技術開発などの議論がたけなわです。マルチメディアが日常的になりつつある現在、この分野が今後我々にどのような風景を見せてくれるか楽しみでもあります。

退官された先生方の近況

長谷川 晃（高知工科大学、NTT基礎技術総合研究所コンサルタント）

私の近況のことを書いても興味を持つてくれる人はあまりいないと思いますが、簡潔に言えばNTT基礎技術総合研究所のコンサルタントを行う傍ら、郵政省や通産省の委託研究で光ソリトン関係や光ネットワークの研究を続けています。皆さんに興味を持ってもらえそうな話題といえば、今唯一もっている講義のことでしょう。神戸女子大学の元理事長の行吉哉女先生からの依頼で、ピカピカの250人程の女子大学一年生を相手に「女性のための幸福論」をもっています。一年間の講義で前期は紫式部、和泉式部、赤染衛門、清少納言の優れた四人の平安女性の生きざまを紹介し、後期では神話から始まり宗教の話や哲学の話をしています。「幸福論」というのは講義の餌のタイトルというようなもので、幸福を得ているのはむしろこちらの方です。それでは講義のエッセンスのところを老子の言葉を使って紹介しておきましょう。老子道徳経第七六節「人の生ずるや柔弱にして、其死するや堅強なり。草木の生ずるや柔脆にして、其死するや枯槁なり。ゆえに堅強なるものは死の徒にして柔弱なるものは生の徒なり。これをもって兵は強ければ則ち勝たず、木は強ければ則ち折る。強大なるは下に処り、柔弱なるものは上に処る。」この言葉が女性の幸福にどうつながるかはご想像におまかせしましょう。

鈴木 肥（摂南大学工学部）

平成10年に大阪大学を定年退官してから2年が過ぎました。3月31日に退官、4月1日から摂南大学に赴任ということで、ゆっくりする暇もなく次ぎの仕事に移りました。摂南大学では工学部電気工学科に所属し、1年次前期に電気工学概論、2年次後期に電気回路を教えています。電気工学概論は入学したばかりのフレッシュマンが対象なので、「学生が入学してやる気をなくしたら先生の責任ですよ」と同僚から圧力をかけられています。こちらのほうは150人近くの学生がいるので、授業中にいかに学生の関心をこちらに向けさせるか大変です。電気回路は30人ほどなので学生を十分掌握できます。このほかに電気工学実験を担当していますが、実質半期に5日ほどです。卒業研究の学生は10人近くいますが、現在のところ4年生だけなのでたいしたことは出来ません。電気工学科の常勤の教官は教授7名、助教授5名で、阪大出身の先生が結構おられます。

摂南大学のほかに住友金属工業（株）の顧問をしていますが、こちらの方は週1回のペースです。尼崎と茨城県の波崎に総合技術研究所、関西文化学術研究都市にハイクオリティライフ研究所があり、主にエネルギーと環境に関する問題の相談に乗っています。学会、団体、官公庁、自治体関係の仕事も多く、時間のやりくりに四苦八苦しています。エネルギー・資源学会では副会長と「エネルギー負荷平準化に関する調査研究」プロジェクト委員長を務めています。昨年の9月にはプロジェクトの一貫として約2週間にわたりデンマーク、ドイツ、イタリア、オランダのエネルギー関係施設を訪問しました。ドイツではシュツットガルト近郊のダイムラー・クライスラー社の燃料電池自動車研究所を訪問しましたが、実用化がかなり近いとの印象を受けました。プロジェクトの成果は今年の夏ごろ本として出版する予定です。大阪市の（財）地球環境センターの関連では、中国の重慶市と天然ガス利用の合理化に関する研究調査を行っています。中国は沿岸部だけでなく内陸の発展も目覚ましく、たとえば重慶のデパートは日本のデパートとまったく遜色がありません。ジェットバスまで売っています。日本の今の状態では、中国に追い越される時代が来るのもそう遠くないと感じます。

阪大を退官してから秘書を持たなくなりましたが、その分情報装備を強化し、仕事の効率を上げるようにしています。電話、FAX、Eメールは家と学校でダブルにしています。最近、ノートパソコンの能力がアップし、日頃よく使う統計データや辞書類をパソコンに格納して持ち歩くことが出来るので、原稿を書くのが大変便利になりました。今持っているパソコンの能力でも、図や写真を入れない限り、これから書く原稿すべてを十分収容できると見えています。

仕事の話ばかりしてきましたが、忙しい合間にねってプライベートの旅行も楽しんでいます。昨年の夏にはイタリアとスイスに出かけました。私は山や湖の方がよいのですが、家内は何と言っても伝統のある町が好きで、買い物も楽しみのようです。ミラノ、ベニス、フィレンツェ、ローマと回り、最後はスイスのインターラーケンに泊ま

りました。イタリアは2000年祭の前年ということで教会や寺院の修復が盛んに行われていました。治安も一頃よりは大分良くなっていると感じました。インターラーケンでは天候にも恵まれ、電車やロープウェイを使って、ベルナーオーバーランドの山々をいろいろな角度から楽しむことが出来ました。

最後に孫のことですが、息子に男、娘に女と二人になりました。両方とも今は東京です。家内は孫が来ると大変だと言ながら、帰ってくるのを心待ちにしているようです。

卒業生の近況

厚海 俊明 (電子・昭48, M50)

昭和50年の卒業当時は、オイルショックで社会が混乱し、日立への入社も20日間の自宅待機の後となり、4月21日でした。あれから、早いもので25年が経ち、私が携わってきた通信分野も劇的な変革を経験しました。入社後、パケット交換のシステム開発に加わった時のデータ交換機の転送能力は、数100ppsでしたが、今や、ルータが数100万ppsを越える転送能力を持つ時代になりました。データ通信が音声通信を越える日を夢見ていましたが、インターネットの浸透でやっと実現しそうです。既に、データトラヒックが音声トラヒックを上回っている米国では、基幹伝送の大容量化が進んでおり、全米をカバーする10Gbpsの光伝送ネットワークが構築されています。現在、私は、この10Gbps光伝送システムの開発を担当しており、ルータの高速化に負けぬよう、320Gbps, Tbpsクラスの光ネットワークの開発を目指しています。日本でも、パソコン台数の急激な伸びと情報家電による家庭へのインターネット接続で基幹伝送容量増大の需要が顕在化する日も、すぐそこに来ています。これから的情報化社会がどう変わって行くかを楽しみにしながら、それを支えるインフラ構築を実現したいと考えている今日この頃です。

((株) 日立製作所 通信事業部)

半田 祐一 (電子・昭51, M53, D56)

81年にキヤノンに入社し配属されたのは目黒の都立大学駅前にある製品技術研究所でした。入社当時は表面弹性波(SAW)を用いた導波路型光偏振器の研究・開発でした。私が担当していたのはTi拡散型LiNbO₃導波路の作製であり、光学損傷(Optical Damage)の評価と原因究明が大きな課題でした。残念ながらレーザビームプリンタに用いられているポリゴンミラーを置き換えることはできませんでしたが、我が社における光導波路技術の基盤作りに貢献できたものと思っています。

その後、組織が中央研究所となり、厚木市森の里に移り、半導体レーザを中心とする光集積デバイスの研究開発に従事し、現在は同研究所の研究推進部を務めるに至っています。

時代はDNA(Digital, Network, Alliance)と言われます。キヤノンはカメラから始まり複写機、プリンタと独自技術と自前開発にこだわり製品を開発し世の中に送りだしてきましたが、これからの時代は他社との競争ではなく共創が不可欠です。21世紀に向けてユーザの期待にあった映像文化の提供を目指した研究・開発をこれからも進めたいと考えています。

余暇は大学時代からの山歩き、春の山スキー、秋の温泉つきの山旅を楽しんでいます。

(キヤノン(株) 中央研究所)

天野 睦士 (電気・昭55, M57)

昭和57年にシャープに入社以来、通信関連および画像処理関連の研究開発に従事した後、4年前からは研究所の技術企画を担当しています。2000年問題もそれほど大きな事故も起こらず無事に新年を迎ましたが、このような問題が世間を騒がせるほどコンピュータやネットワークが我々の身近に浸透しているということでしょう。ものはや情報機器と通信機器とは融合した一つの機器となり、我々の研究所も情報システムと通信システムを統合した「情報通信システム開発」に衣替えし、新たなデジタル情報家電機器の開発を推進しています。

インターネットが当たり前の今日、お客様が求めるものは機器そのものから「その機器を利用してどんな楽しみ

が得られるか」というサービス・コンテンツへと向かっています。従ってハードウェアを販売するだけでは利益が得られず、我々の使命はより良い製品を作り上げるだけでなく、いかにお客様に受け入れられるシステム・サービスを提供できるか、というビジネスモデルの提案まで求められるようになりました。少し以前ではソフトウェアを特許にすることさえ苦労していましたが、今やビジネスモデル特許が話題になる時代へと変化しています。我々もこの世の中のスピードに置いていかれないよう、誰もがより使いやすい製品を、そして皆が楽しめるシステム・サービスを提供していくよう努力していきます。

塩野 照弘（電子・昭56、M58）

松下電器産業（株）に入社してほぼ17年になりますが、私の場合、回折光学素子（Diffractive Optics）の研究開発を中心に取り組んできました。このテーマは恩師である電子工学研究科教授の西原先生に頂いたものであり、興味の中心は断面を鋸歯形状化してどれくらい実用化レベルの効率に向うかということでした。入社した当時は、高効率回折光学素子に取り組んでいるグループはそれほど多くありませんでしたが、1990年ごろからバイナリオプティクスと言われる汎用性・量産性のある技術が開発されて以来、注目を集め、研究者・開発者の数は世界中で数多いものと推測されます。

2年前から大阪府の地域COEプロジェクト「テラ光情報基盤技術開発」に参加させて頂き、私のサブテーマとして、次世代の高性能回折光学素子の要素技術開発に取り組んでおります。本格的な最新の電子ビーム描画装置の導入とAFM等の評価装置のおかげで、飛躍的に性能が上がり、実用レベルの素子の開発が実現できつつあり、光学素子の切り札になるものと期待しております。

現在は、光ディスク開発センターにて、高密度DVDの光学系等に用途は絞られておりますが、新しいものであればあるほど、回折光学素子のような新しい素子が有用になるものと信じております。

（松下電器産業（株）光ディスク開発センター）

森田 哲司（電気・昭63、M2）

大阪ガス（株）に入社してはや10年が経ちました。入社してから今日まで家庭用のガス機器の商品開発部署に所属し、入社当時は現在大阪ドームがある大正地区に勤務しておりましたが、ドームの建設に伴い現在は舞洲（2008年オリンピックのメイン会場候補地）に勤務地を移しています。仕事の方は入社から数年間は一般家庭用のガス給湯器のバーナや熱交換器などの設計に従事しておりましたが、現在は給湯暖房機（セントラルヒーティング）の商品開発に携わっています。家庭用のガス分野では給湯暖房機の販売に注力しており、床暖房や浴室換気乾燥機などの暖房端末とのセットにより、より快適な住空間の提案を行っている状況です。

世の中に商品を出す仕事に携わるようになり、商品を出す前の故障率低減のための確認作業、安全性・耐久性の確保、使い勝手の向上、環境対応等、種々の項目を通して自分自身いろいろ勉強させてもらっています。現在、最も大きな課題は熱効率を向上させてCO₂の排出量を削減する給湯暖房機の開発です。従来の機器では熱効率80%程度だったものを燃焼排ガスの潜熱を回収することで90%まで向上させようとしています。潜熱を回収するために発生する酸性の凝縮水の処理、機器の耐久性の確認などいろいろ課題はありますが、できるだけ早く世の中に商品を出していきたいと思っています。

規制緩和などの時代の流れからますますエネルギー業界も競争が激化すると思われますが、今後も仕事に励むとともに1人の人間として成長していきたいと思います。

（大阪ガス（株）営業技術部）

黒田 淳（電気・平5、M7）

三菱重工業に入社してから、はや5年近くがたちました。入社以来今日に至るまで高砂研究所に勤務しています。所属は変わりませんが、研究内容は少しづつ変化してきました。入社当初は配管等の非破壊検査技術の研究を行っておりましたが、その後、画像処理関連の仕事に移行し、港湾等の自動監視システム用に検知・識別処理を高速に行う専用ハードウェアの開発やJPEGを利用した圧縮伸長カードの開発などに取り組んでおります。近年、処理の複雑化やあつかう画像の高精細化が進んでおり、ハードウェアにはより短納期、高速かつ高機能化が求められているため、効率の良い製品開発が重要になってきました。努力を続ける毎日が続いておりますが、技術者としてはまだまだ経験も浅く、知識も乏しいため、実力も十分ではありませんが、毎日少しづつでも成長していきたいと考えています。

えています。

このところ景気の悪い話が続いている、当社もうかうかできない状況です。仕事に追われる毎日ですが、研究者である以上、これから10~20年先に必要となるであろう製品を開発するために、日々アンテナを高くしたいと思います。

(三菱重工業(株) 技術本部 高砂研究所 電子技術研究室)

青野 慶久 (情シス・平6)

「サイボウズ」という名の会社を立ち上げたのが、2年半前のこと。設立当初はたったの3人で、2DKのマンションが職場。夢も希望も不安も全部持ったまま、全力で働き続けてきた。徐々に社員も増え、気づけば管理職。この6年間で、大企業の下っ端から、ベンチャー企業の立ち上げ、そして管理職まで経験した。こんな28歳はそういうまい。なんという幸運。グループウェアを開発し、インターネットで販売する。設立当初からそのスタイルを貫いてきた。売れるはずがないと、当初は誰もがそう言った。しかし、どんなときも正しいことを言うのはお客様。お客様の意見に耳を傾ければ、必ず売れる。そう信じている。ネット系ベンチャーは儲かるとか、ネットバブルだとか、周りがうるさくなってきた。しかし、そんなことは知ったことではない。私たちがお客様を喜ばせ続けられるかどうか、それが一番大事なことだ。企業って何だろう、利益ってなんだろう。とにかく、仕事が楽しくて仕方がない今日この頃。

(サイボウズ(株))

児島 史秀 (通信・平8、M9、D11)

平成11年に森永研究室を去った後、郵政省通信総合研究所に入所し、以来横須賀市にあるYRP(横須賀リサーチパーク)に通勤する日々が続いている。私の所属する無線伝送研究室では、情報通信の見地からITS(Intelligent Transport Systems; 高度道路交通システム)をとりあげており、ミリ波によるレディオオンファイバ(ROF; Radio On Fiber)技術を用いた路車間通信システムの構想や、車車間通信における電波伝搬特性の実験検証等、幅広い分野にわたって研究が進められています。当然のことながら、職場では学生時代の専門から大きく外れた分野を相手にする機会は多く、まさに日々是勉強ですが、そのことは一方で新たな好奇心をも喚起することになり、確かな充実感を覚えながら毎日を過ごしています。また今更のようですが、大学の研究室での経験が非常に役に立つことを痛感しています。国際会議を始めとする数々の口頭発表や、論文発表、さらに研究室内での様々な議論等の機会を用意して下さった先生方に感謝しています。最後に、平成13年の独立行政法人化を控え、この先研究体制の変化等、いくつか困難な局面はあるやもしれませんが、現在の心境を忘れぬよう精力的に研究に打ち込んでいきたいと思っている次第です。

(郵政省通信総合研究所 横須賀無線通信研究センター)

ご寄付

以下の方々からご寄付を頂いております。ここに記して厚く御礼申し上げます。

一般寄付

永田 潔 様 (電気・昭3) ¥3,000
楊 聰哲 様 (電気・昭28) ¥4,000
樋下 重彦 様 (通信・昭33) ¥4,000
佐藤 久紘 様 (電子・昭43) ¥4,000
稻垣 尋紀 様 (情報・平9) ¥4,000

荒巻 恭士 様 (電気・昭24) ¥10,000
田中 昇三 様 (通信・昭33) ¥4,000
瓜生 浩朗 様 (電気・昭38M) ¥4,000
黒井 隆 様 (電子・昭61) ¥4,000

化、若齢化、福祉の発展を心から願っております。そこで、一つ具体的な要求として、提出したいと思います。私も阪大の寮に一年間住みましたが、大阪大学の留学生会館は寮費が安いけれども、設備と衛生面ではもっと力を入れるべく、お金もかけて、よりきれいな住環境になれば良いなと思っております。

四月から日本の会社に勤めることになりますが、研究室で学んだ専門知識を活かして、皆さんの期待を背かず、優秀なエンジニアになるように頑張りたいと思います。そして、日本、中国および世界の国々の更なる発展と進歩のために勉める所存でございます。皆さんの応援、ご鞭撻ありがとうございます。

工学研究科・工学部のホームページのご案内

大阪大学大学院工学研究科・工学部では、情報公開の一環として各種情報を WWW (World Wide Web) のホームページ (URL:<http://www.eng.osaka-u.ac.jp/Homepage-j.html>) を通じて公開し、学内の教職員・学生のみならず、工学部を受験しようと考えている高校生をはじめとする学外の人々にも有用と考えられる情報を提供している。具体的には、以下の情報をこのホームページを起点として閲覧することができる。

1. 工学研究科・工学部について

工学研究科長からのメッセージ、工学研究科・工学部の歩みと特徴、工学研究科、工学部へのアクセス手段、入学から卒業までの教育課程などの情報を提供している。

2. 各専攻のホームページ一覧

各専攻についてのより詳しい情報は、このページから辿ることによって得ることができる。因みに電気系各専攻およびレーザー核融合研究センターのホームページは次の通りである。

<http://www.eie.eng.osaka-u.ac.jp/> (電子情報エネルギー工学専攻)
http://www.pwr.eng.osaka-u.ac.jp/index_j.html (電気工学専攻)
<http://www.comm.eng.osaka-u.ac.jp/> (通信工学専攻)
<http://www.ele.eng.osaka-u.ac.jp/HomePage-j.html> (電子工学専攻)
<http://www.ise.eng.osaka-u.ac.jp/> (情報システム工学専攻)
<http://www.ile.osaka-u.ac.jp/ILE-jp.html> (レーザー核融合研究センター)

3. シラバス（授業概要）・履修要覧

各年度の工学部各学科の概要、教育課程表、専門教育科目のシラバス（授業概要）を提供している。

4. 工学研究科・工学部研究業績データベース

学術論文、著書、作品などの工学研究科・工学部の教官の研究業績を、題目、著者、キーワードなどを用いて検索することができるデータベースを提供している。

今後、このホームページの内容をさらに充実させていく予定である。このホームページに関するご意見、ご要望があれば、webmaster@eng.osaka-u.ac.jpまでお寄せ頂きたい。

(工学研究科 情報通信システム委員会 委員長 西尾 章治郎 (情報システム)記)

研究室紹介

電気工学専攻
電気材料・物性工学講座
電気物性工学領域



教授 佐々木孝友

本領域は 1967 年（昭和 42 年）工学部附属工業教員養成所より振り替えで設置された電気工学科第五講座（電気物性講座）に端を発する。川辺和夫教授が創設にあたり、その後 1977 年（昭和 52 年）より 1980 年（昭和 55 年）末まで電気第四講座の犬石嘉雄教授が兼任、1985 年（昭和 60 年）からは平木昭夫教授が担当となった。電気物性、量子電子工学の講義と実験の指導にあたる一方で、半導体と金属との界面反応や表面物性に関する研究が行われた。1993 年（平成 5 年）には平木教授の定年退官に伴い、同講座において 1992 年（平成 4 年）から学科定員の臨時贈に伴う所属教授となっていた佐々木孝友教授が担当教授となり後を引き継ぎ、現在に至っている。

研究室の正式名称は、大学院重点化による改組により標記のように改められた。現在の研究室の人員構成は、教授 佐々木孝友、講師 森勇介、助手 吉村政志、事務補佐員 白井宏子の教職員とポスドク 1 名、大学院生 18 名（後期課程 8 名、うち 5 名が社会人ドクター、前期課程 10 名）、学部生 6 名、研究生 1 名である。

現在、本領域では、将来のエネルギー問題や高度情報化社会での技術革新の中核をなす新機能材料の開発を行っている。特に、紫外線発生を目的とした波長変換光学結晶、熱電エネルギー変換材料、新電子デバイスを目的とした窒化物結晶やその他の新機能半導体材料など、バルクおよび薄膜結晶を中心とした新材料の開発及び結晶育成技術の開発について基礎と実用化の両面から研究を行うことで、研究者の養成と研究成果の社会への還元を目指している。

主な研究内容は以下の通りである。

- (1) 紫外光発生用・新波長変換結晶の創成
- (2) 医療・半導体産業用の紫外レーザー光源の実用化に関する研究
- (3) 完全結晶成長技術の研究
- (4) 青色レーザー用・GaN バルク結晶等の新しい結晶育成方法の開発
- (5) ナノ構造、及び強い電子相関を利用した高効率エネルギー変換材料の開発
- (6) 炭素系材料の化学結合制御とディスプレー用素子への応用

また特に産業応用にも力点を置いており、社会人ドクターを多く採用するよう勧めている。

電気工学専攻
電気材料物性工学講座
電気工学基礎論領域



教授 伊藤利道

本領域の淵源は、1932年故竹山説三名誉教授が創設された「電気工学第三講座」に遡る。その後1963年より同講座を御担当になった山中千代衛教授（現名誉教授、元瀧電会会长）が、電気工学の新分野としてレーザー工学の発展に精力的に御尽力され、レーザー核融合研究センターの設立にも多大な貢献をされた。山中先生の御退官の後、1988年青木亮三教授（現名誉教授）が同講座を担当され、当時脚光を浴び始めた高温超伝導に関する開拓的研究が展開された。その後「電気工学第三講座」は、1989年の組織改革により「電気工学基礎論講座」と改称され、更に1996年には大学院重点化により、電気工学教室の電気材料・物性系3講座（創設当初の第三、第四及び第五講座に該当）が「電気材料・物性工学講座」（大講座）として再編され、この内、旧「電気工学基礎論講座」は、「電気工学基礎論領域」と称される専門領域を担当するようになった。青木先生の御退官後、1999年3月より、伊藤利道が後述の構想に基づき同領域を担当し現在に至っている。

この間、担当授業も大きく変遷し、竹山先生時代の放電工学、照明工学や電気計測等、から、山中先生時代には、電磁プラズマ工学、電気計測、量子エレクトロニクス、核融合工学や非線形光学等となり、青木先生時代には、量子力学、超伝導工学や超伝導物性等が講義された。現在は、伊藤教授が堺一男助教授や村上博成学内講師とともに、量子力学、計測工学、超伝導工学、表面界面工学、電気材料・物性工学特論等の授業を担当している。

本領域では、省エネルギー・環境問題を材料工学・電気物性的観点から取り組むため、低エネルギー・プラズマ、イオン、分子、電子等を自在に制御・活用することにより、環境に優しい高効率機能材料の作製、あるいは基板に依存しない高品質結晶薄膜の新作製法の開発等を行うとともに、薄膜の表面・界面からバルクまでマクロからミクросケールにわたって様々な評価を行い材料物性を解析している。具体的には現在、(1)気相合成ダイヤモンド、(2)酸化物高温超伝導体及び誘電体や(3)ナノメータ構造シリコン系新機能材料等を対象として、走査トンネル顕微鏡を含む各種電子顕微鏡、電子分光法、イオン散乱分光法や光物性計測等を駆使した基礎研究を行なっている。特に、日本学術振興会未来開拓学術推進研究のプロジェクト研究の一つである「ダイヤモンドによる次世代電子エミッターの開発」を受託研究として推進するとともに、先端科学技術共同研究センターを通じた民間との共同研究として「低エネルギー・ビームによる結晶性薄膜形成に関する研究」を行っている。

電子情報エネルギー工学専攻 先端通信工学講座



教授 北山研一

本領域は、1996年に大学院重点化にともない新設され、通信工学科基礎論講座から移籍した長谷川晃教授が就かれた。1998年に同教授が停年退官され、1999年からは北山研一が担当している。当初から光ソリトンを用いた超高速光通信の研究を開始し、現在も活発に研究を続けている。郵政省通信・放送機構の委託研究「トータル光通信に関する研究開発」プロジェクトを通じて通信工学専攻の講座とともに受託し、中心となって同プロジェクトを推進している。2000年2月現在の陣容は原晋介助教授、丸田章博助手、大学院生18名、学部学生7名である。

現在はさらに研究分野を広げ、インターネットを支える超大容量・超高速フォトニックネットワークの研究や、広帯域マルチメディア無線の研究を行っている。本講座では実験と理論の両方のバランスをとりながら研究を進めており、国内では光通信関連の実験を行える数少ない大学の1つである。そのために同講座の出身者は企業などの研究所でも即戦力として最先端で活躍している。

具体的な研究内容は次の通りである。

(1) フォトニックネットワークに関する研究

波長や符号を用いて大量の情報を一本の光ファイルで伝送する多重光伝送技術をベースとし、インターネットのパケットを光のままで超高速に転送する技術に関する研究を行っている。

(2) 光ソリトン通信に関する研究

群速度分散と非線形効果を同時に克服するための技術として分散マネージメントに注目し、マネージメントを施した伝送系の光ソリトンの伝搬や、光ソリトンの波長分割多重システムへの適用について研究を行っている。

(3) 広帯域マルチメディア無線通信に関する研究

加入者無線ネットワークに適用が期待される各種の多元接続方式と知的信号処理技術を融合した知的無線通信方式の研究に取り組んでいる。

母校のニュース

大阪大学「21世紀ドリーム・プラン」

西原 浩（通信・昭35）

1. まえがき

21世紀を目前にして、大阪大学はいま大きな2つの問題を抱え、重要な変革期にある。一つは、独立行政法人化の問題であり、これは阪大だけではなく、国立大学全体の問題である。2003年から施行されることになっており、そのための決断を2000年の夏頃までにしなければならぬ、現在、活発な議論がなされている。

他の一つは、大阪大学は2001年に大阪帝国大学創立70周年を迎えることである。この70周年からの100年間に向けてのドリームを描こうと岸本総長が発案し、全学の将来構想委員会において、その基本構想が「21世紀ドリーム・プラン」として報告書（A4版50頁）にまとめられ、昨年10月に全学の教官に配布された。その中のいくつかは、70周年記念事業として実現しようとしている。

本原稿の趣旨は、後者の話題を濁電会会員に紹介することにある。

2. 「21世紀ドリーム・プラン」

この報告書は、大阪大学がいま何を考えるべきか、また基本姿勢を表す標語である「地域に生き世界に伸びる」をどう実践するのかを明らかにするために、作成された。

全体は9章からなっており、第2章「ユニバーシティとしての阪大」では、阪大の目指す道が述べられている。阪大はユニバーシティ（総合大学）としてのアイデンティティを確立することが大切であること、その中で、弾力的な教育プランを確立すること、学問のインターファカルティ構想、ユニバーシティとしてのキャンパスプランなどが述べられている。特に、豊中キャンパスと吹田キャンパスにやっと集結を果たしたが、一方では大阪の町から離れ、社会の新たなニーズに鈍感になっていること、などが指摘されている。これからは、もっと大阪の町の中に広がって、町と共生するキャンパス展開を構想する必要があること、また文化を求め、市民との交流を求めて、大阪の町に帰ることの必要性を訴えている。

第3章「地域に生きる」では、キャンパス近隣住民

との共生、図書館はじめ体育館などの施設の開放、あるいは大学の知的財産の地域社会への貢献、または地域からの大学への参画などの重要性が述べられている。

第4章「世界に伸びる」では、グローバルスタンダードの通用する大学、国際的学術研究推進に貢献できる大学、外国人研究者や留学生のためのキャンパス整備、などの取り組みについて述べられている。

第5章「同窓会のサービス強化」では、大学全体としての同窓会組織を持っていないのは、大学の発展を考えるとき致命的であること、各学部・大学院同窓会のネットワーク化を推進し、ハブ機能を発揮することのできる『大阪大学同窓会』の設立を提案している。これは後でもう少し詳しく触れたい。

第6章「中之島センター：知的情報の発信と交流の場」 大阪大学は、本学草創の地中之島にもう一つの拠点を求めるることは、大学と町との共生を進める上で極めて重要なことであると指摘し、「大阪大学中之島センター」の設立を提案している。これは記念事業の一つに取り上げれ、検討されている。この内容については、4. 項でもう少し詳しく述べたい。

第7章「吹田キャンパスの21世紀：知的交流の実験空間」では、住環境・宿泊施設の充実、第8章「豊中キャンパスの21世紀：文化と電灯のプラザ」では、大学ミュージアムの設置の提案がかかっている。

そして第9章は「むすび」になっている。

3. 創立70周年記念事業

記念イベントが2001年5月5日（土、祝日）、6日（日）の2日間、「地域に生き世界に伸びる－阪大発21世紀」を統一テーマとして、中之島の阪大跡地のすぐ近くに新しくオープンした大阪国際会議場で開催される予定である。

2日間のイベントとしては、式典、祝賀会、コンサート、国際シンポジウム、ディジタル・イメージ・シアター、など盛りだくさんの企画がなされている。

事業としては、記念アルバム刊行や「大阪大学新世纪セミナー」（全30巻）記念出版、および「中之島センター」記念施設建設などが計画されている。

また、70周年記念のロゴが決まっており、イメージキャラクターは学内応募作品の中から選考され、豊中キャンパスから発掘されたマチカネワニをイメージしたものに決まっている。（図参照）



OSAKA UNIVERSITY

70周年記念ロゴ



70周年記念イメージキャラクター

4. 「中之島センター」(仮称) の設立構想

阪大の標語である、地域の発展に寄与し、さらに世界の文化に貢献するには、知的情報と交流のフロンティアとしてソフトウェアとハードウェアの両方を兼ね備えることが必要であり、そのセンターの設立が創立70周年記念事業の一つとして、推進されている。

報告書第6章から抜粋すると、センターが持つべき基本的機能は、教育・研究機能、情報発振機能、そして社会との交流機能としている。

その教育・研究機能として、

- 1) 社会人大学院授業（昼夜開講制大学院）
- 2) 高度職業人講座（科学・技術講習会、高度技術研修、レフレッシュ教育）
- 社会への情報発振機能として
- 3) 中之島情報センター（教育・研究情報データベース、大学情報の展示）
- 4) コンサルタント業務（技術、法律、経営、医療）
- 5) 技術移転機関（T L O）業務
- 社会との交流機能としては
- 6) ヘルスケア・クラブ（同窓会員、後援会員等へのヘルスケア支援を行う組織）

7) 中之島センター講演会（文化講演会、学術講演会、シンポジウム）

8) 一般社会人講座（教養・文化講座、科学講座）

このセンターの建設費は、文部省からの経費と50周年記念でいただいた募金をベースにすることになっている。大阪市内にこのようなセンターが建設されれば、多くの同窓生にとって利用価値の高いものとなるであろう。

5. 「大阪大学同窓会連合会」設立

現在、大阪大学の各部局にはそれぞれ同窓会が存在し、独自に活動しているが、部局間の垣根を越えた横断的・全学的な連携がないのが現状であり、残念な状況である。創立70周年を機会に、全学同窓生・教職員が相集い、部局間同窓会などのネットワーク化を役割とする全学組織「大阪大学同窓会連合会」を設立し、大阪大学の発展に寄与することを考えている。各部局の同窓会との細かな詰めをする必要があるが、現在、設立の方向で進んでいる。

澪電会、工業会、そして連合会とややこしくなるが、巧く機能していくように知恵を出し合うことが必要である。

6. むすび

以上、大阪大学内で議論されている21世紀をにらんでのドリーム・プランに関連する事柄について、私の知っている範囲で説明をした。大学と同窓生との関わりは、ますます密になっていかなければならない時代にきているようである。いずれ卒業生の皆様に募金のお願いもしなければならない。澪電会会員におかれましては、澪電会のことだけでなく、大阪大学全体の発展のためにも、一層のご協力ををお願いしたい。

(電子工学専攻・教授、附属図書館長／評議員)

池田博昌教授最終講義

通信工学専攻教授・池田博昌先生は、平成12年3月31日をもって定年退官されることとなりました。ご退官を迎えるにあたり、最終講義が平成12年2月2日（水）午後1時より電気系メモリアルホールにて行われました。当日は、学内のみならず、卒業生等、学外からも多数聴講に来られました。通信工学専攻長の塩澤俊之教授より池田先生の御歴歴が紹介された後、「交換技術の進歩とともに40年」と題する90分の講義が始まりました。まず、熊谷三郎先生のご指導のもと通信工学科においてミリ波FMレーダに関する研究を卒業研究として行われた後に、日本電信電



話公社（現 NTT）に入社され、交換機のデジタル化（時分割交換機）に基盤研究から実用化に至る過程のすべてに携わられたことを述べられました。この過程において、基礎研究の段階では、交換機通話路の電子化へのアプローチとして PAM（パルス振幅変調）交換通話路、デジタル化へのステップとしての PCM 交換機（DEX-T1 号交換機）の制御系システム、PCM-TDMA 衛星通信方式の実験として世界初の実衛星を使った実験システムなどについての研究を進められました。また、実用化への取り組みとして、電子交換機通話路系システムの高機能化に向けた、多接点封止型スイッチを用いた交換システムの開発、およびネットワークディジタル化に向けた戦略的移行形態に基づくシステム開発を進めて来られました。開発されたシステムとして、NTT のネットワークに順次導入された D60 形中継交換機、D70 形加入者線交換機、D70 形 ISDN システムがあげられました。そして端末までのデジタル化を実現する ISDN のサービス開始時点の 1988 年において、ようやく開発競争においてアメリカを抜き国際的にトップレベルに到達したことを感慨深くお話しになられました。また、その後、あらゆる情報が単一のネットワーク上で完全にデジタル情報として通信される ATM 技術の開発の方向付けに努力されたことも述べられました。NTT において日本の交換機のデジタル化に向けた研究開発に一貫して携わられた後、1994 年に大阪大学に来られてからは、マルチメディアへの展開を軸に ATM からインターネットにわたる広範な研究テーマに取り組まれ、多くの業績を残されたことを回顧されました。また、今後のネットワーク研究の進むべき方向についても示唆されました。さらに、大阪大学において工学教育の改善に力を注がれしたことや、学協会での活動内容など、広い範囲にわたり先生の大蔵大学での 6 年間を振り返られました。最後に、先生のご趣味であるゴルフやヨットの話に触れられ、大阪大学において楽しく研究生活を過ごされたことについて改めて感謝の言葉を述べら

れました。以上の内容の最終講義を終えられると聴講者全員から大きな拍手が送られました。

講義終了後、先生のご指導に感謝の意を込めた花束贈呈が研究室の橋谷知詠子秘書から行われ、再度の大きな拍手に包まれました。交換機の進歩とともに世界との競争の中でネットワークの高機能化に取り組まれた先生の研究歴が凝縮され、実用化を最終目標とする工学研究の真髄を身をもって実践して来られたことが実感できる最終講義がありました。なお、最終講義の後、別室で池田先生を囲んだパーティが開かれ、約 2 時間にわたって和やかな雰囲気での懇談が行われました。

（山本 幹（通信・昭 58）記）

熊谷信昭元大阪大学総長 文化功労者顕彰祝賀会

元大阪大学総長熊谷信昭先生（大阪大学名誉教授、科学技術会議議員）には、このたび、新しい電磁波論の開拓と電磁波工学の確立に関する顕著な功績、および多くの有為な人材の育成とわが国の科学技術の発展に対する多大な貢献により、平成 11 年度の文化功労者顕彰をお受けになりました。先生の栄えある文化功労者顕彰をお祝いするため、先生縁りの 600 名を超える方々のご列席のもとに、平成 12 年 2 月 12 日、リーガロイヤルホテル「光琳の間」において「熊谷信昭元大阪大学総長文化功労者顕彰祝賀会」が開催されました。

祝賀会は、通信工学専攻長塩澤俊之教授の司会で進められ、まず祝賀会の発起人を代表して大阪大学名誉教授で現在大阪大学工業会副会長を務めておられる鈴木 育先生から開会の挨拶が行われ、熊谷先生のご略歴ならびにご業績の紹介がありました。引き続き、多数のご来賓を代表して、岸本忠三大阪大学総長、村井眞二大阪大学大学院工学研究科長ならびに文部事務次官佐藤禎一様のお三方から丁重なご祝辞を頂きました。お三方のご祝辞の後、挨拶に立たれた熊谷先生は、



「今まで、私は仕事の上で不愉快な思い、辛い思いをしたことがただの一度もない、本当に幸せな人間です」、「世に師の恩というのがありますが、同じように弟子の恩というのもあるのではないかという気がしています。これからは、多くの弟子たちに報いる人生を送りたいと思っています」としみじみと述懐されました。

祝電披露、花束の贈呈に続いて、NHKニュースナインのキャスターとしてお馴染みの道傳愛子さんの司会で、祝賀会のハイライトである鏡割りが行われました。鏡割りには、壇上に並べられた五つの薦樽を囲んで、政財界、学界、官界など、各界から招待されたご来賓35名の方々が参加されました。特に、鏡割りに先立ち、就任早々の太田房江大阪府知事からスピーチを頂き、参会者の注目を集めました。

鏡割りに引き続いて、前大阪大学総長金森順次郎先生のご発声で乾杯が行われ後、暫しの間、熊谷先生ご夫妻を囲んでなごやかな歓談が続きました。祝賀会も終りに近づき、名残惜しい雰囲気の中で、先生ご夫妻は参会者の盛大な拍手に送られて退場され、その後、電電会会長藤井克彦先生による閉会の辞をもって祝賀会は盛会のうちに散会しました。

(塩澤俊之(通信・昭39)記)

池田博昌先生退官記念祝賀会

通信工学専攻情報通信システム工学講座通信網工学領域教授を平成12年3月末日に退官された池田博昌先生の退官記念祝賀会が、同年3月17日(金)千里阪急ホテルクリスタルホールにおいて、通信工学専攻主催により開催された。祝賀会は池田先生ご夫妻ご臨席のもと、電気系教官をはじめ、学内外の知人など約90名の出席者で、終始なごやかな雰囲気のもとに午後6時より8時まで行われた。

通信工学専攻長塩澤俊之教授の司会で開会され、ま



ず通信工学専攻を代表して実行委員長の森永規彦教授からご挨拶があり、池田先生のご経歴やご功績を紹介された後、記念品の贈呈が行われた。続いて、花束贈呈が行われ、池田先生がご出席の方々にお礼の挨拶をされた。その後、前田肇教授のご発声で乾杯が行われ、歓談に移った。

祝賀会は着席ビュッフェ形式をとり、テーブルごとに歓談の輪が広がるとともに、池田先生が各テーブルを廻られご出席の方々とご歓談になり、またたく間に時間が経過した。最後に、塩澤俊之教授から閉会の挨拶があり、満場拍手の中、先生ご夫妻がご退場になった。会場出口では先生ご夫妻が出席者一人一人に丁寧にご挨拶され、祝賀会はお開きとなった。

なお、この祝賀会の翌日の3月18日(土)には、祝賀会出席者を含む28名の参加者による池田博昌先生退官記念ゴルフコンペが、小野東洋ゴルフ倶楽部において開催された。雲一つない晴天に恵まれ、この季節としては珍しい温暖な気候のもと、楽しいゴルフコンペが開催された。

(山本 幹(通信・昭58)記)

「今まで、私は仕事の上で不愉快な思い、辛い思いをしたことがただの一度もない、本当に幸せな人間です」、「世に師の恩というのがありますが、同じように弟子の恩というのもあるのではないかという気がしています。これからは、多くの弟子たちに報いる人生を送りたいと思っています」としみじみと述懐されました。

祝電披露、花束の贈呈に続いて、NHKニュースナインのキャスターとしてお馴染みの道傳愛子さんの司会で、祝賀会のハイライトである鏡割りが行われました。鏡割りには、壇上に並べられた五つの薦樽を囲んで、政財界、学界、官界など、各界から招待されたご来賓 35 名の方々が参加されました。特に、鏡割りに先立ち、就任早々の太田房江大阪府知事からスピーチを頂き、参会者の注目を集めました。

鏡割りに引き続いて、前大阪大学総長金森順次郎先生のご発声で乾杯が行われ後、暫しの間、熊谷先生ご夫妻を囲んでなごやかな歓談が続きました。祝賀会も終りに近づき、名残惜しい雰囲気の中で、先生ご夫妻は参会者の盛大な拍手に送られて退場され、その後、鷗電会会長藤井克彦先生による閉会の辞をもって祝賀会は盛会のうちに散会しました。

(塩澤俊之 (通信・昭 39) 記)

池田博昌先生退官記念祝賀会

通信工学専攻情報通信システム工学講座通信網工学領域教授を平成 12 年 3 月末日に退官された池田博昌先生の退官記念祝賀会が、同年 3 月 17 日（金）千里阪急ホテルクリスタルホールにおいて、通信工学専攻主催により開催された。祝賀会は池田先生ご夫妻ご臨席のもと、電気系教官をはじめ、学内外の知人など約 90 名の出席者で、終始なごやかな雰囲気のもとに午後 6 時より 8 時まで行われた。

通信工学専攻長塩澤俊之教授の司会で開会され、ま



ず通信工学専攻を代表して実行委員長の森永規彦教授からご挨拶があり、池田先生のご経歴やご功績を紹介された後、記念品の贈呈が行われた。続いて、花束贈呈が行われ、池田先生がご出席の方々にお礼の挨拶をされた。その後、前田肇教授のご発声で乾杯が行われ、歓談に移った。

祝賀会は着席ビュッフェ形式をとり、テーブルごとに歓談の輪が広がるとともに、池田先生が各テーブルを廻られご出席の方々とご歓談になり、またたく間に時間が経過した。最後に、塩澤俊之教授から閉会の挨拶があり、満場拍手の中、先生ご夫妻がご退場になった。会場出口では先生ご夫妻が出席者一人一人に丁寧にご挨拶され、祝賀会はお開きとなった。

なお、この祝賀会の翌日の 3 月 18 日（土）には、祝賀会出席者を含む 28 名の参加者による池田博昌先生退官記念ゴルフコンペが、小野東洋ゴルフ俱楽部において開催された。雲一つない晴天に恵まれ、この季節としては珍しい温暖な気候のもと、楽しいゴルフコンペが開催された。

(山本 幹 (通信・昭 58) 記)

教室情報

▼平成 12 年度 学生見学旅行

電 気

3月6日(月) (株)富士通 厚木研究所(神奈川県厚木市)
(株)日本電信電話 物性科学基礎研究所(神奈川県厚木市)

3月7日(火) (株)日立製作所 中央研究所(東京都国分寺市)
(株)富士電機 東京システム製作所(東京都日野市)
(株)帝人 東京研究センター(東京都日野市)

3月8日(水) (株)日本電気 府中事業所(東京都府中市)
(株)KDD 東京西支店(東京都新宿区)

参加学生人数: 42名
引率教官: 伊藤利道教授、堺一男助教授、村上博成学内講師

電 子

3月6日(月) (株)日立製作所 中央研究所(東京都国分寺市)
3月7日(火) (株)東芝 府中事業所(東京都府中市)
東京エレクトロン(株) 山梨事業所(山梨県韮崎市)

3月8日(水) サントリー(株) 白州蒸留所(山梨県北巨摩郡白州町)

参加学生人数: 39名
引率教官: 吉野勝美教授、大森裕助教授、藤井彰彦助手

情報システム

3月1日(水) (株)日立製作所 ソフトウェア事業部(神奈川県横浜市)

通信システム事業本部(神奈川県横浜市)

3月2日(木) (株)東芝 研究開発センター(神奈川県川崎市)

NTT コミュニケーションウェア(千葉県千葉市)

3月3日(金) 横河電機(株) 本社工場(東京都武蔵

野市)

日本テレコム(株) 新宿ネットワークサービスセンター(東京都渋谷区)

参加学生人数: 36名

引率教官: 薦田憲久教授、一階良知助手

なお、通信工学科目については、平成 11 年度より春季見学旅行は取り止めとなりました。また、電気系四学科目とも、夏季の関西地域企業見学は従来どおり行っております。

▼平成 12 年度五専攻長

電 気 工 学 専 攻	伊藤 利道 教授
通 信 工 学 専 攻	前田 肇 教授
電 子 工 学 専 攻	吉野 勝美 教授
情 報 シ ス テ ム 工 学 専 攻	薦田 憲久 教授
電子情報エネルギー工学専攻	堀池 寛 教授

▼電気系人事

森 勇介	講 師	昇 任	11.5.1	電 気
戸出英樹	助教授	昇 任	11.6.1	情報システム
福西宏有		逝 去	11.7.8	電 子
春本 要	講 師	昇 任	11.11.16	大型計算機センター(情報システムより)
宮永憲明	教 授	昇 任	12.3.16	レーザー
大道博行	教 授	昇 任	12.3.16	レーザー
池田博昌	教 授	退 官	12.3.31	通 信
大森 裕	教 授	昇 任	12.4.1	先端科学技術共同研究センター(電子より)
赤澤堅造	教 授	転 任	12.4.1	情報システム(神戸大学より)
奥野竜平	助 手	転 任	12.4.1	情報システム(神戸大学より)

▼母校の教壇に立つ本会会員(平成 11 年度)

- ・電気工学専攻「離散事象システム論」
川崎重工業(株) 技術統括本部電子・制御技術開発センター ロボットプロジェクト部 システムグループ長
長尾 陽一(電子・昭47)
- ・電気工学科「特別講義」

関西電力（株） 常務取締役
岸田 哲二（電気・昭 38）
・電気工学科「照明工学」
松下電器産業（株） 客員
坪 秀三（電気・昭 35）
・通信工学専攻「通信工学特別講義」
日本電気（株） 取締役支配人
林 宏美（通信・昭 38）
・通信工学専攻「通信工学特別講義」
(株) 日立製作所ディジタルメディアグループ企画
センター センター長
岸本 清治（通信・昭 47）
・通信工学専攻「通信工学特別講義」
住友電気工業（株）伊丹製作所 常務取締役
吉田 健一（通信・昭 39）
・通信工学科「音響工学」
関西大学工学部長 電子工学科 教授
野村 康雄（通信・昭 36）
・電子工学専攻「電子工学特別講義Ⅰ」
三菱電機（株）産業システム研究所所長室 主管技
師長
鷺野 翔一（電子・昭 43）
・電子工学専攻「電子工学特別講義Ⅱ」
住友電気工業（株） 常務
吉田 健一（通信・昭 39）
・電子工学専攻「電子工学特別講義Ⅲ」
高知工科大学 教授
加納 剛太（電気・昭 36）
・電子工学専攻「電子工学特別講義Ⅲ」
N T T 関西移動通信網（株） 取締役経営企画部長
西邑 省三（電子・昭 45）
・電子工学専攻「集積光学特論」
N T T 物性科学基礎研究所 企画担当部長
向井 孝彰（電子・昭 50）
・電子工学専攻「量子機能デバイス特論」
筑波大学物質工学系 教授
川辺 光央（電気・昭 36）
・電子工学科「特別講義」
(株) 日立製作所 常務 情報・通信グループ情報
システム事業本部長
山本 晃司（電子・昭 39）
・電子工学科「集積回路工学」
三菱電機（株）3 D グラフィックスプロジェクトマ
ネージャー
藤島 一康（電気・昭 48）
・電子工学科「集積回路技術論」

コマツ 顧問
島 亨（電気・昭 36）
・電子工学科「光波電子工学」
三菱電機（株）映像情報開発センター DVD 開発ブ
ロジェクトグループ開発チーム チームリーダ
藤田 輝雄（電子・昭 53）
・情報システム工学専攻「情報システム工学特別講義
Ⅰ」
(株) 富士通研究所 パーソナルシステム研究所 P
C メディア研究部長
村上 敬一（電子・昭 49）
・情報システム工学専攻「情報システム工学特別講義
Ⅱ」
日本電気（株）ヒューマンメディア研究所メディア
デザイン TG 研究部長
笠原 裕（電子・昭 48）
・情報システム工学科「計算機援用設計論」
シャープ（株）IC 事業本部設計技術開発センター
第 2 開発室 室長
神戸 尚志（電子・昭 51）

会員の方々のご活躍

熊谷信昭元総長が文化功労者に選ばれる

熊谷信昭名誉教授・元総長（通信・昭和 28）は平成 11 年度の文化功労者に選ばれ、その顕彰式が平成 11 年 11 月 4 日に執り行われました。先生は、新しい電磁波論の開拓と、現在電磁波工学と呼ばれている重要な工学の分野の確立に主導的役割を果たされるとともに、多くの有為な人材の育成とわが国の科学技術の発展に対して多大の貢献をされたことにより、名誉ある文化功労者顕彰をお受けになりました。

滑川敏彦名誉教授が勲三等旭日中綬章を受賞

滑川敏彦名誉教授（通信・昭 20）は平成 11 年度春の叙勲において、「勲三等旭日中綬章受賞」をお受けになりました。先生の数々のご業績と教育・研究におけるご貢献が高く評価されたものと誠に慶賀に存じ、心よりお祝い申し上げます。

受 賞（学会賞等）

以下の方々が、次の各賞を受賞されました。

尾崎弘名誉教授（通信・昭 17）

IEEE/CAS Golden Jubilee Medal

平成 11 年 12 月 21 日

（授賞式は ISCAS2000（スイス・ジュネーブ、平成 12 年 5 月 28-31 日）において行われます）

【受賞理由】 IEEE/CASS (Circuits & System Society) 歴史の最初の 50 年間における目標高揚に向けての格別な貢献

白川 功教授（電子・昭 38、M40、D43：情報システム工学専攻）

IEEE/CAS Golden Jubilee Medal

平成 11 年 12 月 21 日

【受賞理由】 IEEE/CASS (Circuits & System Society) 歴史の最初の 50 年間における顕著な業績

長谷川晃 元教授（通信・昭 32、M34: ATR）

IEEE/LEOS 量子エレクトロニクスアワード

平成 11 年

【受賞理由】 ファイバ中信号伝送のマスター方程式の導出、光ソリトンの発見および全光高速通信システムへのソリトン応用の理論開発への貢献

濱口智尋教授（電気・昭 36、M38、D41：電子工学専攻）

英国物理学会フェロー（Fellow of Institute of Physics）

平成 11 年 10 月

【受賞理由】 物理学分野での高い評価と英国物理学会発行学術誌編集委員としての学会への寄与

堤 誠 教授（通信・M 昭 38：京都工芸繊維大学）

IEEE フェロー

平成 12 年 1 月 1 日

【受賞理由】 静磁波デバイス、フェライトコムポーネントとマイクロ波教育

熊谷信昭元総長・名誉教授（通信・昭和 28 旧）

IEEE Third Millennium Medal

【受賞理由】 IEEE の発展への寄与

池田博昌教授（通信・昭 34：通信工学専攻）

IEEE Third Millennium Medal

【受賞理由】 IEEE の発展への寄与

中野隆生氏（電気・昭 37、M39：三菱電機顧問、トロン協会）

IEEE Third Millennium Medal

【受賞理由】 IEEE の発展への寄与

白川 功教授（電子・昭 38、M40、D43：情報システム工学専攻）

IEEE Third Millennium Medal

【受賞理由】 IEEE の発展への寄与

中井貞雄教授（電気・昭 36、M38、D41：電子情報エネルギー工学専攻）

電気学会業績賞

平成 11 年 5 月 20 日

【受賞理由】 光・量子デバイス分野の学術的・技術的先導と啓蒙を通した電気工学発展への貢献

宮原秀夫教授（通信・昭 42、M44、D48：基礎工学研究科情報工学専攻）

電子情報通信学会業績賞

平成 11 年

【受賞理由】コンピュータネットワークのモデル化と性能評価に関する先駆的研究

熊谷信昭元総長・名誉教授（通信・昭和 28 旧）

大川情報通信基金 大川賞

平成 11 年 11 月 25 日

【受賞理由】新しい電磁波論の開拓と電磁波工学の確立に関する顕著な功績、および多くの有為な人材の育成とわが国の科学技術の発展に対する多大な貢献

長岡良富氏（通信・昭 39：松下電器産業（株））

科学技術庁長官賞功労者表彰

平成 11 年 4 月 13 日

【受賞理由】超精密非球面ガラス成形レンズと応用製品の開発育成

菅原康弘助教授（電子工学専攻）

日本学術振興会ナノプローブテクノロジー賞

平成 11 年 5 月 21 日

【受賞研究】FM 検出静電気力顕微鏡による半導体表面の電荷の原子レベル観察

森雄介助手（電気・平 1、M 3：電気工学専攻）

K S V F ベンチャーアイデア大賞・優秀賞

平成 11 年 5 月 17 日

【受賞研究】YbGdYCOB 多機能単一素子による超小型・紫外レーザ光発生装置

阿部洋一氏（通信・昭 57：松下電器産業（株））（他 1 名）

日本電機工業会電機工業技術功績者表彰奨励賞

平成 11 年 4 月 15 日

【受賞理由】ふげん発電所向け入退管理システムの開発

角野眞也氏（通信・昭 59：松下電器産業（株））（他 2 名）

電気通信普及財団テレコムシステム技術賞

平成 11 年 3 月 24 日

【受賞理由】透過度情報を用いたテンプレートビデオ符号化

堀孝正教授（電気・昭 36：三重大学）

電気学会著作賞

平成 11 年 5 月 20 日

【受賞著書】パワーエレクトロニクス

須藤勝氏（通信・昭 32：大阪工業大学）

情報処理学会論文賞

平成 11 年 5 月 20 日

【受賞論文】内容と構造を対象とした KJ 法 B 型文章評価方法の提案と適用

藤井彰彦助手（電子・平 5、M 7、D 9：電子工学専攻）
応用物理学会賞 B（奨励賞）

平成 11 年 9 月 1 日

【受賞論文】Polymer Electroluminescent Diodes with Ring Microcavity Structure

柳田晃司氏（電子・平 3、M 5、D 8：名古屋大学）
(他 2 名)

日本エムイー学会論文賞・阪本賞

平成 11 年 4 月 22 日

【受賞論文】時系列超音波断層像の輝度勾配処理による血管弹性指標の非侵襲測定法の検討

太田快人教授（電子・昭 55、M57：電子制御機械工学専攻）

計測自動制御学会論文賞・蓮沼賞

平成 11 年 7 月 29 日

【受賞論文】補間点拡大法の L 1、H ∞ 制御問題での収束性に関する考察

石月秀貴氏（電子・平 5、M 7：電子工学専攻）

応用物理学会講演奨励賞

平成 11 年 9 月 1 日

【受賞論文】LiNbO₃ 導波路 QPM-SFG デバイスを用いた光サンプリングの実験

藤井彰彦助手（電子・平 5、M 7、D 9：電子工学専攻）

応用物理学会講演奨励賞

平成 11 年 9 月 1 日

【受賞論文】ポリジシラニレンオリゴチエニレンの光学的性質

梶井博武氏（電子・平 8、M10：電子工学専攻）

応用物理学会講演奨励賞

平成 12 年 3 月 28 日

【受賞論文】ナノ周期構造を有する多孔性カーボンの電気的光学的特性

久利敏明氏（通信・平4、M6、D8：郵政省通信総合研究所）

電子情報通信学会学術奨励賞

平成11年

【受賞論文】60GHz帯光外部変調による光ミリ波ダウリンクシステム

武田憲幸氏（通信・平3、M5：KDD研究所）

電子情報通信学会学術奨励賞

平成11年

【受賞論文】980nm励起低雑音広帯域化EDFAを用いた光増幅中継系による2.5Gbit/s、40WDM、12000km伝送実験

原田博司氏（通信・M平6：郵政省通信総合研究所）

電子情報通信学会学術奨励賞

平成11年

【受賞論文】差分情報駆動型通信用ディジタル信号処理チップセットを用いたマルチモードソフトウェアラジオシステム

正城敏博助手（情シス・平5、M7、D9：電子情報エネルギー工学専攻）

電子情報通信学会学術奨励賞

平成11年

【受賞論文】仮想環境内ナビゲーションのための鳥瞰カメラ視点の直感的制御方法

池田雅夫教授（通信・昭44、M46：電子制御機械工学専攻）

システム制御情報学会 学会賞論文賞

平成11年5月19日

【受賞論文】入出力データ配列に基づくシステム表現と制御方式

就任

以下の方々が各学会の要職に就任されました。

森永規彦教授（通信・M昭40、D43：通信工学専攻）

電子情報通信学会副会長

（平成11年5月21日より2年間）

吉野勝美教授（電気・昭39、M41、D47：電子工学専攻）

日本液晶学会会長

（平成12年1月1日より1年間）

辻毅一郎教授（電気・昭41、M43：電気工学専攻）

システム制御情報学会副会長

（平成11年5月19日より1年間）

湯電会会費納入のお願い

陽春の候、会員各位には益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。本会の活動に変わらないご支援を頂き有り難く存じております。

湯電会の財政状況は、諸般の事情により非常に厳しい状況にあります。本会の活動は全て会員各位からの会費に依存しております。本会の活動をより活発にするために、何卒、平成12年度会費（4,000円）の早期納入（できれば6月末日までに）にご協力賜りますようお願いする次第であります。別表のように、卒業年次度の新しい会員各位の納入率が低くなっています。卒業して間もない方々も、是非ご協力のほどお願い申し上げます。

また、会費納入の便宜を計るため会費の自動振込制度も採用しておりますので、是非ご利用下さい。また、預金口座の変更ご希望の場合は、湯電会事務局まで御一報下されば、折り返し口座変更手続きに必要な預金口座振替依頼書をご送付致します。

なお、卒業年が昭和27年以前の方の会費は免除になっておりますので、納入の必要はございません。また未納の過年度会費はご請求申し上げないことになっております。

湯電会会計幹事

卒業年次別会費納入状況

卒業年次	会員数	会費納入者数	会費納入率
1952-1954	308	176	57%
1955-1959	373	193	52%
1960-1964	528	284	54%
1965-1969	553	261	47%
1970-1974	585	208	36%
1975-1979	587	198	34%
1980-1984	605	198	33%
1985-1989	643	209	33%
1990-1994	768	190	25%
1995-1999	877 (562 [†])	91	16%
合計	5827 (5512 [†])	2008	36%

※大阪大学大学院在学生を除く

同窓会だより

電気・昭13 同窓会

私たちが東野田の工学部電気科を卒業した時は総員20名であった。それから62年経って皆が米寿を目の前にした今は生存者は僅か8名になってしまった。折角の機会だからその8名の消息を書いてみたいと思う。

①井上巖（旧姓藤原） 壮年期には国際電々で国外にも駐在したが、今は東京で嫁さん一家と同居。右眼を角膜損傷で失明、左眼も脳梗塞で視力半減で字の読み書きが不自由だが身体は丈夫なので奥さんを頼りに散歩を日課にしている。

②尾形秀人 国鉄技術研究所から日本大学の先生も勤めたが、今は体調を崩して医者通いと寝たり起きたりの毎日で夫人の世話になっている。病気は気からと言うから自愛を祈りたい。

③小野田万寿哉 元労働基準法関係の行政官でもあって労働安全衛生の玄人。今でも勉強心旺盛。人並みに脚力の衰えを感じるというが、ダイオキシン問題とか原子力問題にはなかなかの関心をもっている。勉強家である。

④北島英二 東芝やその関連会社にも勤めたが、昭和58年に宮仕えを一切止め芸術家（絵や木彫）の勉強を始めた。ところが平成6年に一人息子を肺癌で亡くし、平成10年には夫人をリューマチで長い看病の末見送った。その上本人は平成8年に医者から前立腺に癌細胞ありと告知されて覚悟をしていたが、その方は誤診であれば良いが今のところ異常がない。頑張れとしか言いようがない。

⑤新林茂 終戦後大病して教育界に入り、高校教育に携わった。昭和61年に退職した。その後は高校生相手の塾の先生をやったり（平成6年まで）地域の老人クラブや生涯学習の世話をやいている。趣味は書道と詩吟。クラスメートの中では一番若い。

⑥吉本弘 昭和59年大同特殊鋼顧問から解放された。夫妻で色々自適の生活。健康で趣味も多く地域の世話もよく見たが、夫人が3年前に左足を骨折した。好きな言葉「愛の反対は憎しみではなく無関心」を地でいて今は買物、炊事を独りで引き受けている。

⑦宮田房近 この人だけが消息を絶って私たちの心配の種。元気なときは東京工大や玉川大学の教授を勤めたが、病気で半身不随になって退職、夫人の世話になっていたが、その夫人が平成9年に亡くなり

傷心の末か10年に「私は死んだものと思ってくれ」との便りをくれたまま通信不能になってしまった。

⑧遠藤常忠 電力会社を退職後、電気主任技術者の資格を活かして中小企業の電気管理技術者として自営していたが、それも平成8年83才で廃業し、今は堺市の泉北ニュータウンで悠々自適している。今年もまた恒例の『消息集2000』を作るつもりである。

（遠藤常忠（電気・昭13））

電気26会（昭和26年卒）同窓会

日 時：平成11年11月11日（木）・12日（金）
場 所：11日 エルイン京都（JR京都駅八条東口側）
：12日 観光



（前列左から）栗山、今村（謙）、永田、西村先生、杉岡、田中、宮本
（後列左から）三宅、下井、本田、近藤、納谷、川崎、北村

出席者：（写真順）

毎年定例の同窓会を、“1”が6字続く記念すべき日を選んで京都で開催した。今年から関西勢が幹事役を担当することになり、開催地が京都であるので宴会と翌日は観光で実施することになった。昨年までは、毎年観光組とゴルフ組にわけていたので、ゴルフ好きな人には少々ご不満のようであった。

恩師、西村先生、桜井先生にはご多用中にもかかわらずご出席を頂き、ご挨拶、ご高話を頂戴した。お陰で有意義な同窓会になった。参加者は遠路関東地方から4名、名古屋地方から1名の参加があり、両先生以下15名となり、また欠席者からも近況についてのお便りがあった。中国地方、四国地方等から3名参加の予定であったが、直前になって健康等の理由から不参加になったのは残念であった。来年の参加を期待した

い。

同窓会場となるホテルは交通の便と多少年齢のことを考えてJR京都駅八条東口から歩いて1分の「エルイン京都」を選んだ。

参加者は皆元気でお互いに酒を酌み交わし、料理に舌鼓をうちながら、近況報告や懐旧談で歓談が続き時間のたつのも忘れ大いに旧交を温めた。それでもまだ物足らず、ホテルレストランの別室で2次会へと移り、夜の更けるまで語り合い、23時頃まで延々6時間に及ぶ同窓会を、来年の再会を約して散会した。翌12日は、あいにく雨中の観光となつたが9名が参加して古都の名所旧跡を尋ねて散策し、午後3時頃JR京都駅で解散した。

(本田記)



であった。われわれのクラスは57名でそのうち7名がこの世になく、残りのうちの29名が出席であるから率としては良いと考えるべきでしょう。

久しぶりに会う顔でお互いの健在を喜びつつ、まず総会に入り型通りの議事を終えたが、澪電会との連絡役を今まで永らくやって頂いた伊藤君から由利君に交代することを承認して頂いた。伊藤君永らくご苦労さ

んでした。

宴会後も別室で夜遅くまで談笑し、時の経つのも忘れた一夜であった。

翌日はオプションでゴルフ組、明石海峡大橋組、その他の組に分かれた。ゴルフ組は洲崎君のお世話で旭国際カントリークラブ（宝塚）へ朝食も取らずに早朝から出発し、明石海峡大橋組は橋を渡り、阪神淡路震災記念館を見学した。明石海峡大橋では現代技術のすばらしさに感動し、また震災記念館ではある大震災の震源である野島断層の正体をこの目で確認し、大いに有意義な一日を過ごすことが出来た。

(前川記)

事務局からのお願い

澪電会事務局へのお問い合わせ事項で目立ちますのは、「終身会員であるのに会費の請求をしてきた」ということです。これは、大阪大学工業会と澪電会とを混同しておられるためと思われますので、工業会と澪電会との関係について簡単にご説明いたします。

大阪大学工学部（その前身校を含む）には、学部全体の同窓会「大阪大学工業会」と学科または系の同窓会（たとえば電気系学科であれば「澪電会」）があります。したがって、澪電会の会員のうちほとんど全ての方は同時に大阪大学工業会の会員なのです。すなわち会員構成の面では澪電会は工業会の下部組織といえます。

ところが、工業会と澪電会とは財政的には全く独立しております。それが独自に会費制度を設けております。したがいまして、工業会会費をすでにお払いになつた方、あるいは工業会の終身会員の方からも、澪電会会費（年会費一律4,000円）を頂戴しております。また、澪電会では終身会員制は設けず、毎年会費をお納め頂いております。

会報や名簿の発行などを含め、澪電会の活動は全て会員各位からの会費に依存致しております。澪電会の健全財政確立のため、今後とも会費納入につきましてよろしくご協力の程お願い申し上げます。

なお、勤務先、住所の変更などにつきましては、工業会とは別途に、澪電会にもお知らせ下さいますよう切にお願い申し上げます。

澪電会 会則

会 則

第1条 本会は澪電会と称する。

第2条 本会は事務所を大阪大学工学部電気系内に置く。

第3条 本会は会員の親睦を図り、学術の発展および科学技術に関する知識の啓発に寄与することを目的とし、そのため適宜必要な事業を行う。

第4条 本会の会員はつきのとおりとする。

(1) 正会員

- イ. 大阪大学工学部および工学研究科ならびにその前身である学校の電気系卒業生。
- ロ. 大阪大学工学部および工学研究科の電気系現教官。
- ハ. 大阪大学工学部電気系教官主査のもとで学位を得た者で、本会に入会を希望する者。

ニ. 特に本会に縁故があり、役員会の承認を得た者。

(2) 特別会員

正会員以外で大阪大学工学部電気系の教授、助教授および講師であった者ならびに特にこの会に縁故のある者。

(3) 学生会員

大阪大学工学部および工学研究科の電気系学生。

(4) 賛助会員

本会の活動を援助する法人または個人。

第5条 本会に次の役員、委員を置く。

会長1名

副会長、幹事、クラス委員

第6条 会長は総会の議を経て選出する。副会長、幹事については会長が指名し、総会で承認を得る。クラス委員については学科別卒業年度別に選出する。

第7条 会長は本会の会務を総括し、本会を代表する。副会長は会長を補佐する。

第8条 会長、副会長、幹事は役員会を組織し、会務を処理する。クラス委員はクラスを代表し、本会に関する重要事項の相談にあずかる。

第9条 役員会の推薦により、本会に顧問を置くことができる。

第10条 役員の任期は2年とする。ただし重任はさまたげない。

第11条 定例総会は年1回開催する。臨時総会は必要に応じて開催する。定例総会では事業報告、会計報告および役員改選その他の議事を行う。

第12条 本会の事業年度、会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第13条 正会員は別に定めた規定により、会費を毎年7月末日までに納入しなければならない。

第14条 本会は必要に応じて支部を置くことができる。

第15条 本会則の変更は総会の議決を経て行う。

細 則

・会費は年額4,000円とする。

(平成7年度より実施)

・満70歳以上の会員は、会費の納入を要しない。

(平成3年度より実施)

編集後記

新たなミレニアムが開幕されて最初の会報「澪電」をここにお届けします。

澪電会では、会長が巻頭ご挨拶で述べておられるように、21世紀にむけて「楽しく役に立つ澪電会」を目指してさらに活動を充実させて行きたいと考えております。その一環として、会報「澪電」もスタイルと内容を刷新したいと考えております。手始めとして、読みやすく親しみのある冊子とするため、本号ではこれまでのB5版からA4版に改め、フォントを少し大きくしました。重量増加に伴う配達費の増加を避けるため、これまでの郵送からメール便に切り替えました。また本号では、母校での将来の方向に関する検討を広く会員の方々にご紹介しご理解とご協力をいただくため、「大阪大学21世紀ドリー

ムプラン」についての解説を執筆いただいて掲載しました。

今後の「澪電」では、伝統的な内容だけでなく、新たな活動方針に添った記事を多く掲載し充実を図ってゆく方針です。内容に関して会員の皆様から積極的なご提案やご意見を頂ければ幸いです。なお、メール便では転居先への転送がなされないので、ご住所等が変更された方はぜひ遅れることなく事務局までご連絡下さるようお願い致します。

最後になりましたが、ご多忙中にもかかわらず、原稿ご執筆をいただいた方々ならびに記事情報収集中にご協力下さった方々に厚く御礼申し上げます。

(編集幹事： 栖原敏明、伊瀬敏史)

発行 濶電会

〒565-0871 吹田市山田丘2-1

大阪大学大学院工学研究科電気系内

電 話：06-6879-7789 (ダイヤルイン)

ファックス：06-6879-7774

電子メール：reiden@pwr.eng.osaka-u.ac.jp